

「自分は番町と下宿と方角の岐れる所で、父に別れようとした。」

「用があるのかい」

「え、少し……」

「まあ好いから宅迄御出」

自分は帽子の鍔へ手を懸けた儘躊躇した。

「いゝから御出よ。自分の宅ぢやないか。偶には来るものだ」

自分は極りの悪い顔をして父の後に随がつた。父はすぐ後を振り向いた。

「宅ぢや近頃御前が来ないので、みんな不思議がつてるんだぜ。二郎は何うしたんだらうつて。遠慮が無沙汰といふが、御前のは無遠慮が無沙汰になるんだから猶悪い」

「さう云ふ譯でもありませんが。……」

「何しろ来るが好い。言譯は宅へ行つて、御母さんにたんとするさ。己はたゞ引つ張つて行く役なんだから」

父はずん／＼歩いた。自分は腹の中で恰も丁年未滿の若者のやうな自分の態度を苦笑しながら、黙つて父と歩調を共にした。其日は此間とは打つて變つて、青春の第一日ともいふべき暖かい光を、南へ廻つた太陽が自分達の上へ投げかけてゐた。獺の襟を付けた重いとんびを纏つた父も、少し厚手の外套を着た自分も、先刻からの運動で、少し温氣に蒸される氣味であつた。其春の半日を自分は父の御蔭で、珍らしく方々引つ張り廻された。此老いた父と、斯う肩を並べて歩いた例は近頃頓となかつた。此老いた父と是から先もう何度斯うして歩けるものか夫も分らなかつた。自分は鈍い不安のうちに、微かな嬉しさと、其嬉しさに伴ふ一種の果敢なさとを感じた。さうして不意に自分の胸を襲つた此感傷的な氣分に、成るべく己れを任せるやうな心持で足を運ばせた。

「御母さんは驚いてゐるよ。御彼岸に御萩を持たせて遣つても、返事も寄こさなければ、重箱を返しもしないつて。一寸でも好いから來ればいゝのさ。來られない譯が急に出來た譯でもあるまいし」

自分は何とも返事をしなかつた。

「今日は久し振りに御前を伴れて行つて皆なに會はせようと思つて。——御前一郎に近頃會つ

た事はあるまい」

「え、實は下宿をする時挨拶をした限です」

「それ見ろ。所が今日は生憎一郎が留守だがね。御父さんが上野の披露會の事を忘れてゐたのが悪かつたけれども」

自分は父に伴れられて、とう／＼番町の門を潜つた。

十

座敷に這入つた時、母は自分の顔を見て、「おや珍らしいね」と云つた丈であつた。自分は殆ど權柄づくで此處へ引つ張られて來ながらも、途々父の情を難有く感じてゐた。さうして暗に家に歸つてから母に會ふ瞬間の光景を豫想してゐた。その豫想が此一言で打ち崩されたのは案外であつた。父は家内の誰にも打ち合せをせずに、全く自分一人の考へで、此不心得な息子に親切を盡して呉れたのである。お重は逃げた飼犬を見るやうな眼付で自分を見た。「そら迷子が歸つて來た」と云つた。嫂はたゞ「入らつしやい」と平生の通り言葉寡な挨拶をした。此間の晩一人で尋

ねて來た事は、丸で忘れて仕舞つたといふ風に見えた。自分も人前を憚つて一口もそれに觸れなかつた。比較的陽氣なのは父であつた。彼は多少の諧謔と誇張とを交せて、今日何うして自分を おびき出したかを得意らしく母やお重に話した。おびき出すといふ彼の言葉が自分には仰山でかつ滑稽に聞えた。

「春になつたから、皆なもちつと陽氣になくつちや不可ない。此頃のやうに黙つて許るちや、丸で幽霊屋敷のやうで、くさ／＼する丈だね。桐畠でさへ立派な家が建つ時節ぢやないか」

桐畠といふのは家のつい近所にある角地面の名であつた。其處へ住まふと何か祟があるといふ昔からの言ひ傳へで、此間迄空地になつてゐたのを、此頃になつて漸く或る人が買ひ取つて、大きな普請を始めたのである。父は自分の家が第二の桐畠になるのを恐れでもするやうに、活々と傍のものに話し掛けた。平生彼の居馴染んだ室は、奥の二間續きで、何か用があると、母でも兄でも、其處へ呼び出されるのが例になつてゐたが、其日はいつもと違つて、彼は初めから居間へは這入らなかつた。たゞ袴と羽織を脱ぎ棄てたなり、其處へ坐つた儘、長く自分達を相手に喋舌つてゐた。

人行

久しく住み馴れた自分の家も、斯うして偶に來て見ると、多少忘れ物でも思ひ出すやうな趣があつた。出る時はまだ寒かつた。座敷の硝子戸は大抵二重に鎖されて、庭の苔を残酷に地面から引き剥す霜が一面に降つてゐた。今は其外側の仕切が悉く戸袋の中に收められて仕舞つた。内側も左右に開かれてゐた。許す限り家の中と大空と續くやうにしてあつた。樹も苔も石も自然から直接に眼の中へ飛び込んで來た。凡てが出る時と趣を異にしてゐた。凡てが下宿とも趣を異にしてゐた。

自分は斯ういふ過去の記念のなかに坐つて、久し振りに父母や妹や嫂と一所に話をした。家族のうちで其處にゐないものは唯兄丈であつた。其の兄の名は先刻からまだ一度も誰の會話にも上らなかつた。自分は其日彼がKさんの披露會に呼ばれたといふ事を聞いた。自分は彼が其招待に應じたか、上野へ出掛けたか、果して留守であるかさへ知らなかつた。自分は自分の前にゐる嫂を見て、彼女が披露の席に臨まないといふ事丈を確めた。

自分は兄の名が話頭に上らないのを苦にした。同時に彼の名が出て來るのを憚つた。さうした心持でみんなの顔を見ると、無邪氣な顔は一つもないやうに思へた。

自分はしばらくしてお重に「お重お前の室を一寸御見せ。綺麗になつたつて威張つてたから見やう」と云つた。彼女は「當り前よ、威張る文の事はあるんだから行つて御覽なさい」と答へた。自分は下宿をする迄朝夕寐起きをした、家中で一番馴染の深い、故のわが室を覗きに立つた。お重は果して後から隨いて來た。

十一

彼女の室は自慢する程綺麗にはなつてゐなかつたけれども、自分の住み荒した昔に比べると、何處かになまめいた匂ひが漂よつてゐた。自分は机の前に敷いてある派手な模様座蒲團の上に胡坐をかいて、「成程」と云ひながら其處いらを見廻した。

机の上には和製のマジヨリカ皿があつた。薔薇の造り花がセゼツション式の一輪瓶に挿てあつた。白い大きな百合を刺繍にした壁飾りが横手に懸けてあつた。

「ハイカラぢやないか」

「ハイカラよ」

お重の澄ました顔には得意の色が見えた。

自分はしばらく其處でお重に調戲つてゐた。五六分してから彼女に「近頃兄さんは何うだい」と左も偶然らしく問ひ掛けて見た。すると彼女は急に聲を潜めて、「そりや變なのよ」と答へた。彼女の性質は嫂とは全く反對なので、斯う云ふ場合には大變都合が好かつた。一旦緒口さへ見出せば、あとは此方で水を向ける必要も何もなかつた。隠す事を知らない彼女は腹にある事を悉く話した。黙つて聞いてゐた自分にも仕舞には蒼蠅い程であつた。

「つまり兄さんが家のものとあんまり口を利かないと云ふんだらう」

「えゝ左右よ」

「ぢや僕の家を出た時と同じ事ぢやないか」

「まあ左右よ」

自分は失望した。考へながら、煙草の灰をマジヨリカ皿の中へ遠慮なくはたき落した。お重は厭な顔をした。

「それペン皿よ。灰皿ぢやないわよ」

自分は嫂程に頭の出来てゐないお重から、何も得る所のないのを覺つて、又父や母のゐる座敷へ歸らうとした時、突然妙な話を彼女から聞いた。

その話によると、兄は此頃テレパシーか何かを眞面目に研究してゐるらしくつた。彼はお重を書齋の外に立たして置いて、自分で自分の腕を抓つた後「お重、今兄さんは此處を抓つたが、お前の腕も其處が痛かつたらう」と尋ねたり、又は室の中で茶碗の茶を自分一人で飲んで置きながら、「お重お前の咽喉は今何か飲む時のやうにぐびぐび鳴りやしないか」と聞いたりしたさうである。

「妾説明を聞く迄は、きつと氣が變になつたんだと思つて吃驚したわ。兄さんは後で佛蘭西の何とかいふ人の遣つた實驗だつて教へて呉れたのよ。さうしてお前は感受性が鈍いから罹らないだつて云ふのよ。妾嬉しかつたわ」

「何故」

「だつてそんなものに罹るのはコレラに罹るより厭だわ妾」

「そんなに厭かい」

「極まつてるぢやありませんか。だけど、氣味が悪いわね、いくら學問だつてそんな事をしちや」

自分も可笑しいうちに何だか氣味の悪い心持がした。座敷へ歸つて來ると、嫂の姿はもう其處に見えなかつた。父と母は差し向ひになつて小さな聲で何か話し合つてゐた。其様子が今しがた自分一人で家中を陽氣にした賑やかな人の様子とも見えなかつた。「あゝ育てる積ぢやなかつたんだがね」といふ聲が聞えた。

「あれぢや困りますよ」といふ聲も聞えた。

十二

自分は其席で父と母から兄に關する近況の一般を聞いた。彼等の擧げた事實は、お重を通して得た自分の知識に裏書をする以外、別に新しい何物をも付け加へなかつたけれども、其様子といひ言葉といひ、如何にも兄の存在を苦にしてゐるらしく見えて、甚だ痛々しかつた。彼等（ことに母）は兄一人のために宅中の空氣が濕つぽくなるのを辛いと云つた。尋常の父母以上にわが子

を愛して來たといふ自信が、彼等の不平を一層濃く染めつけた。彼等はわが子から是程不愉快にされる因縁がないと暗に主張してゐるらしく思はれた。従つて自分が彼等の前に坐つてゐる間、彼等は兄を云々する外、何人の上にも非難を加へなかつた。平生から兄に對する嫂の仕打に飽き足らない顔を見せてゐた母でさへ、此時は彼女について終に一口も訴へがましい言葉を洩らさなかつた。

彼等の不平のうちには、同情から出る心配も多量に籠つてゐた。彼等は兄の健康について少なからぬ掛念を有つてゐた。其健康に多少支配されなければならぬ彼の精神状態にも冷淡ではあり得なかつた。要するに兄の未來は彼等にとつて、恐ろしいXであつた。

「どうしたものだらう」

是が相談の時必ず繰り返されべき言葉であつた。實を云へば、一人々々離れてゐる折ですら、胸の中でぼんやり繰り返して見るべき二人の言葉であつた。

人行
「變人なんだから、今迄もよく斯んな事があつたには有つたんだが、變人丈にすぐ癒つたもんだがね。不思議だよ今度は」

兄の機嫌買を子供のうちから知り抜いてゐる彼等にも、近頃の兄は不思議だつたのである。陰鬱な彼の調子は、自分が下宿する前後から今日迄少しの晴間なく續いたのである。さうして夫が段々險悪の一方に向つて眞直に進んで行くのである。

「本當に困つちまふよ妾だつて。腹も立つが氣の毒でもあるしね」
母は訴へるやうに自分を見た。

自分は父や母と相談の揚句、兄に旅行でも勸めて見る事にした。彼等が自分達の手際では到底駄目だからといふので、自分は兄と一番親密なHさんにそれを頼むが好からうと發議して二人の賛成を得た。然し其頼み役には是非共自分が立たなければ濟まなかつた。春休みにはまだ一週間あつた。けれども學校の講義はもうそろ／＼仕舞になる日取であつた。頼んで見るとすれば、早くしなければ都合が悪かつた。

「ぢや二三日うちに三澤の所へ行つて三澤からでも話して貰ふか又様子によつたら僕がぢかに行つて話すか、何方かにませう」

Hさんとそれ程懇意でない自分は、何うしても途中で三澤を置く必要があつた。三澤は在學中

Hさんを保證人にしてゐた。學校を出てからも殆んど家族の一人の如く始終其處へ出入してゐた。歸りがけに挨拶をしようと思つて、一寸嫂の室を覗いたら、嫂は芳江を前に置いて裸人形に美しい着物を着せて遣つてゐた。

「芳江大變大きくなつたね」

自分は芳江の頭へ立ちながら手を掛けた。芳江はしばらく顔を見なかつた叔父に突然綾されたので、少しはにかんだ様に唇を曲げて笑つてゐた。門を出る時は彼は五時に近かつたが、兄はまだ上野から歸らなかつた。父は久し振りだから飯でも食つて彼に會つて行けと云つたが、自分はどう／＼それ迄腰を据ゑてゐられなかつた。

十三

翌日自分は事務所の歸りがけに三澤を尋ねた。丁度髪を刈りに今しがた出掛けた所だといふので、自分は遠慮なく上り込んで彼を待つ事にした。

「此兩三日は滅切お暖かになりました。もうそろ／＼花も咲くで御座いませう」

主人の歸る間座敷へ出た彼の母は、何時もの通り丁寧な言葉で自分に話し掛けた。

彼の室は例の如く繪だのスケッチだので鼻を突きさうであつた。中には額縁も何にもない裸の儘を、ピンで壁の上へぢかに貼り付けたのもあつた。

「何だか存じませんが、好だもので御座いますから、無暗と貼散らかしまして」と彼の母は辯解がましく云つた。自分は横手の本棚の上に、丸い壺と並べて置いてあつた一枚の油繪に眼を着けた。

それには女の首が描であつた。其女は黒い大きな眼を有つてゐた。さうしてその黒い眼の柔かに濕つたぼんやりしさ加減が、夢の様な匂を畫幅全體に漂はしてゐた。自分は凝とそれを眺めてゐた。彼の母は苦笑して自分を顧みた。

「あれも此間いたづらに描きましたので」

三澤は畫の上手な男であつた。職業柄自分も繪の具を使ふ道位は心得てゐたが、藝術的の素質を饒かに有つてゐる點に於て、自分は到底彼の敵ではなかつた。自分は此繪を見ると共に可憐なオフヒリヤを連想した。

「面白いです」と云つた。

「寫眞を臺にして描いたんだから氣分が能く出ない、いつそ生きてるうちに描かして貰へば好かつたなんて申して居りました。不幸な方で、二三年前に亡くなりました。折角御世話をして上げた御嫁入先も不縁でね、あなた」

油繪のモデルは三澤の所謂出戻りの御嬢さんであつた。彼の母は自分の聞かない先きに、彼女に就いて色々語つた。けれども女と三澤との關係は一言も口にしなかつた。女の精神病に罹つた事にも丸で觸れなかつた。自分も夫を聞く氣は起らなかつた。却て話頭を此方で切り上げるやうにした。

問題は彼女を離れるとすぐ三澤の結婚談に移つて行つた。彼の母は嬉しさうであつた。

「あれも色々御心配を掛けましたが、今度漸く極まりました……」

人行
此間三澤から受取つた手紙に、少し一身上の事に就て、君に話があるから其内是非行くと書いてあつたのが、此話でやつと悟れた。自分は彼の母に對して、たゞ人並の祝意を表して置いたが、心のうちでは其嫁になる人は、果して此油繪に描いてある女のやうに、黒い大きな滴るほどに潤

つた眼を有つてゐるだらうか、それが何より先に確めて見たかつた。

三澤は思つた程早く歸らなかつた。彼の母は大方歸りがけに湯にでも行つたのだらうと云つて、何なら見せに遣らうかと聞いたが、自分はそれを斷つた。然し彼女に對する自分の話は、氣の毒な程實が入らなかつた。

三澤に何うだらうと云つた自分の妹のお重は、まだ何處へ行くとも極らずに愚圖々々してゐる。さういふ自分もお重と同じ事である。折角身の堅まつた兄と嫂は折り合はずにゐる。——斯んな事を對照して考へると、自分は何うしても快活になれなかつた。

十四

其内三澤が歸つて來た。近頃は身體の具合が好いと見えて、髪を刈つて湯に入つた後の彼の血色は、殊につや／＼しかつた。健康と幸福、自分の前に胡坐をかいた彼の顔はたしかに此二つのものを物語つてゐた。彼の言語態度も亦それに匹敵して陽氣であつた。自分の持つて來た不愉快な話を、突然と切り出すには餘りに快活すぎた。

「君何うかしたか」

彼の母が席を立てて二人差向ひになつた時、彼は斯う問ひ掛けた。自分は澁りながら、兄の近況を彼に訴へなければならなかつた。其兄を勧めて旅行させるやうに、彼からHさんに頼んで呉れと云はなければならなかつた。

「父や母が心配するのを只黙つて見てゐるのも氣の毒だから」

此最後の言葉を聞く迄、彼は尤もらしく腕組をして自分の膝頭を眺めてゐた。

「ぢや君と一所に行かうぢやないか。一所の方が僕一人より好からう、精しい話が出来て」

三澤にそれ丈の好意があれば、自分に取つても、それに越した都合はなかつた。彼は着物を着換ると云つてすぐ座を起つたが、しばらくすると又襖の陰から顔を出して、「君、母が久し振りにから君に飯を食はせたいつて今支度をしてゐる所なんだがね」と云つた。自分は落ちついて馳走を受ける氣分を有つてゐなかつた。然しそれを斷つたにした所で、飯は何處かで食はなければならなかつた。自分は曖昧な返事をして、早く立ちたいやうな氣のする尻を元の席に据ゑてゐた。さうして本棚の上に載せてある女の首をちよい／＼眺めた。

「どうも何にも御座いませぬのに、御引留め申しまして嘸御迷惑で御座いましたらう。ほんの有合せで」

三澤の母は召使に膳を運ばせながら又座敷へ顔を出した。膳の端には古さうに見える丸谷焼の猪口が載せてあつた。

それでも三澤と一所に出たのは思つたより早かつた。電車を降りて五六丁歩るいて、Hさんの應接間に通つた時、時計を見たらまだ八時であつた。

Hさんは銘仙の着物に白い縮緬の兵児帯をぐる／＼巻き付けた儘、椅子の上に胡坐をかいて、「珍らしいお客さんを連れて來たね」と三澤に云つた。丸い顔と丸い五分刈の頭を有つた彼は、支那人のやうにでく／＼肥つてゐた。話振も支那人が慣れない日本語を操る時のやうに、鈍かつた。さうして口を開くたびに、肉の多い頬が動くので、始終にこ／＼してゐるやうに見えた。彼の性質は彼の態度の示す通り鷹揚なものであつた。彼は比較的堅固でない椅子の上に、わざ／＼兩足を載せて胡坐をかいたなり、傍から見ると左も窮屈さうな姿勢の下に、夷然として落付いてゐた。兄とは殆んど正反對な此様子なり氣風なりが、却て兄と彼とを結び付ける一種の力に

なつてゐた。何にも逆らはない彼の前には、兄も逆らふ氣が出なかつたのだらう。自分はHさんの悪口を云ふ兄の言葉を、今迄つひそ一度も聞いた事がなかつた。

「兄さんは相變らず勉強ですか。あゝ勉強しては不可ないね」
悠長な彼は斯う云つて、自分の吐いた煙草の煙を眺めてゐた。

十五

やがて用事が三澤の口から切り出された。自分はすぐ其後に隨いて主要な點を説明した。Hさんは首を捻つた。

「そりや少し妙ですね、そんな筈はなささうだがね」
彼の不審は決して偽とは見えなかつた。彼は昨日Kの結婚披露に兄と精養軒で會つた。そこを出る時にも一所に出た。話が途切れないので、浮か／＼と二人連立つて歩いた。仕舞ひに兄が疲れたといつた。Hさんは自分の家に兄を引張つて行つた。
「兄さんは此處で晩飯を食つた位なんだからね、何うも少しも不斷と違つた所はないやうでし

たよ

我儘に育つた兄は、平生から家で氣六づかしい癖に、外では至極穩かであつた。然しそれは昔の兄であつた。今の彼を、たゞ我儘の二字で説明するのは餘りに單純過ぎた。自分は已を得ず其時兄がHさんに向つて重に何んな話をしたか、差支ない限りそれを聞かうと試みた。

「なに別に家庭の事なんか一口も云やしませんよ」

是も嘘ではなかつた。記憶の好いHさんは、其時の話題を明瞭に覚えてゐて、それを最も淡泊な態度で話して呉れた。

兄は其時しきりに死といふものに就いて云々したさうである。彼は英吉利やアメリカで流行る死後の研究といふ題目に興味を有つて、大分其方面を調べたさうである。けれども、何れも是も彼には不満足だと云つたさうである。彼はメーテルリンクの論文も讀んで見たが、矢張り普通のスピリチュアリズムと同じ様に詰らんものだと嘆息したさうである。

兄に關するHさんの話は、凡て學問とか研究とかいふ側許りに限られてゐた。Hさんは兄の本領として夫を當然の如くに思つてゐるらしかつた。けれども聞いてゐる自分は、どうしても此兄

と家庭の兄とを二つに切り離して考へる譯には行かなかつた。寧ろ家庭の兄が斯ういふ研究的な兄を生み出したのだとしか理解出来なかつた。

「そりや動搖はしてゐますね。御宅の方の關係があるかないか、そこは僕にも解らないが、何しろ思想の上で動搖して落付かないで弱つてゐる事は慥なやうです」

Hさんは仕舞に斯う云つた。彼は其上に兄の神經衰弱も肯がつかつた。然し夫は兄の隠してゐる事でも何でもなかつた。兄はHさんに會ふたんびに、ほとんど極り文句のやうに、それを訴へて已まなかつたさうである。

「だから此の際旅行は至極好いでせうよ。さう云ふ譯なら一つ勸めて見ませう。然しうんと云つてすぐ承知するかね。中々動かない人だから、ことによると六づかしいね」

Hさんの言葉には自信がなかつた。

「貴方の仰しやる事なら素直に聞くだらうと思ふんですが」

「左右も行かんさ」

Hさんは苦笑してゐた。

表へ出た時は彼は十時に近かつた。それでも閑静な屋敷町にちらほら人の影が見えた。それが皆なそゞろ歩きでもするやうに、長閑かに履物の音を響かして行つた。空には星の光が鈍かつた。恰も眠たい眼をしばたゝいてゐるやうな鈍さであつた。自分は不透明な何物かに包まれた氣分を抱いた。さうして薄明るい往來を三澤と二人肩を並べて歸つた。

十六

自分は首を長くしてHさんの消息を待つた。花のたよりが都下の新聞を賑し始めた一週間の後になつても、Hさんからは何の通知もなかつた。自分は失望した。電話を番町へ掛けて聞き合せの厭になつた。何うでもするが好いといふ氣分で凝としてゐた。そこへ三澤が來た。

「何うも旨く行かないさうだ」

事實は果して自分の想像した通りであつた。兄はHさんの勧誘を断然断つて仕舞つた。Hさんは已を得ず三澤を呼んで、其結果を自分に傳へるやうに頼んだ。

「それでわざ／＼來て呉れたのかい」

「まあ左右だ」

「何うも御苦勞さま、濟まない」

自分は是以上何を云ふ氣も起らなかつた。

「Hさんはあゝ云ふ人だから、自分の責任のやうに氣の毒がつてゐる。今度は事が餘り突然なので旨く行かなかつたが、此次の夏休みには是非何處かへ連れ出す積だと云つてゐた」

自分は斯ういふ慰藉をもたしめてくれた三澤の顔を見て苦笑した。Hさんのやうな大悠な人から見たら、春休みも夏休みも同じ事なんだからうけれども、内側で働いてゐる自分達の眼には、夏休みといへば遠い未來であつた。其遠い未來と現在の間には大きな不安が潜んでゐた。

「然しまあ仕方がない。元々此方で勝手なプログラムを拵へて置いて、それに當てはまるやうに兄を自由に動かさうといふんだから」

自分はとう／＼諦めた。三澤は何にも批評せずに、机の角に腕を突き立てて、其上に頭を載せたり自分の顔を眺めてゐた。彼はしばらくしてから、「だから僕のいふ通りにすれば好いんだ」と云つた。

人行

此間且さんに兄の事を依頼しに行つた歸り途に、無言な彼は突然往來の真中で自分を驚かしたのである。今迄兄の事に就て一言も發しなかつた彼は、其時不意に自分の肩を突いて、「君兄さんを旅行させるの、快活にするのつて心配するより、自分で早く結婚した方が好かないか。其方がつまり君の得だぜ」と云つた。

彼が自分に結婚を勧めたのは、其晩が始めてではなかつた。自分は何時も相手がないとばかり彼に答へてゐた。彼は仕舞に相手を拵へて遣ると云ひ出した。さうして一時はそれが殆ど事實になり掛けた事もあつた。

自分は其晩の彼に向つても矢張り同じやうな挨拶をした。彼はそれを何時もより冷淡なものとして記憶してゐたのである。

「ぢや君のいふ通りにするから、本當に相手を出して呉れるかい」

「本當に僕のいふ通りにすれば、本當に好いを出す」

彼は實際心當りがあるやうな口を利いた。近いうち彼の娶るべき女からでも聞いたのだらう。彼はもう大きな黒い眼を有つた精神病の御嬢さんに就いては多くを語らなかつた。

「君の未來の細君は矢つ張りあゝいふ顔立なんだらう」

「さあ何うかな。いづれそのうち引き合はせるから見て呉れ玉へ」

「結婚式は何時だい」

「ことによると向ふの都合で秋迄延ばすかも知れない」

彼は愉快らしかつた。彼は來るべき彼の生活に、彼の有つてゐる過去の詩を投げ懸けてゐた。

十七

四月は何時の間にか過ぎた。花は上野から向島、それから荒川といふ順序で、段々咲いていつて段々散つて仕舞つた。自分は一年のうちで人の最も嬉しがる此花の時節を無爲に送つた。然し月が替つて世の中が青葉で包まれ出してから、振り返つて遣り過ぎた春を眺めると甚だ物足りなかつた。それでも無爲に送れた丈が有難かつた。

家へは其後一回も足を向けなかつた。家からも誰一人尋ねて來なかつた。電話は母とお重から一二度掛つたが、それは自分の着る着物に就ての用事に過ぎなかつた。三澤には全く會はなかつ

た。大阪の岡田からは花の盛りに繪端書が又一枚來た。前と同じやうにお貞さんやお兼さんの署名があつた。

自分は事務所へ通ふ動物の如く暮してゐた。すると五月の末になつて突然三澤から大きな招待状を送つて來た。自分は結婚の通知と早合點して封を裂いた。所が案外にもそれは富士見町の雅樂稽古所からの案内状であつた。「六月二日音樂演習相催し候間同日午後一時より御來聽被下度候此段御案内申進候也」と書いてあつた。今迄斯ういふ方面に關係があるとは思はなかつた。三澤が、何うしてこんな案内状を自分に送つたのか、丸で解らなかつた。半日の後自分は又彼の手紙を受け取つた。其手紙には、六月二日には、是非來いといふ文句が添へてあつた。是非來いといふ位だから彼自身は無論行くに極まつてゐる。自分は折角だからまづ行つて見ようと思ひ定めた。けれども、雅樂そのものに就ては大した期待も何もなかつた。それよりも自分の氣分に轉化の刺戟を與へたのは、三澤が餘事の如く名宛のあとへ付け足した、短い報知であつた。

「Hさんは嘘を吐かない人だ。Hさんはとうとう君の兄さんを説き伏せた。此六月學校の講義を切り上げ次第、二人は何處かへ旅をする事に約束が出来たさうだ」

自分は父のため母のため且兄自身のため喜んだ。あの兄がHさんに對して旅行しようとする氣分になつたとすれば、單にそれ丈でも彼には大きい變化であつた。偽りの嫌ひな彼は必ずそれを實行する積でゐるに違ひなかつた。

自分は父にも母にも實否を問ひ合はせなかつた。Hさんに向つても其消息を確める手段を取らなかつた。たゞ三澤の口からも少し精しい所を聞かせて貰ひたかつた。それも今度會つた時で構はないといふ氣があるので、彼の是非來いといふ六月二日が暗に待ち受けられた。

六月二日は生憎雨であつた。十一時頃には少し歇んだが、季節が季節なのでからりとは晴れなかつた。往來を行く人は傘をさしたり疊んだりした。見附外の柳は烟のやうに長い枝を垂れてゐた。其下を通ると、青白い粉か微が着物にくつついて何時迄も落さないやうに感ぜられた。

雅樂所の門内には俚が澤山並んでゐた。馬車も一二臺ゐた。然し自動車は一つも見えなかつた。自分は玄關先で帽子を人に渡した。其人は金の鈕釦のついた制服のやうなものを着てゐた。もう一人の人が自分を觀覽席へ連れて行つて呉れた。

「其處いらへ御掛けなすつて」

彼はさう云つて又玄關の方へ歸つて行つた。椅子はまだ疎らに占領されてゐる丈であつた。自分分は成るべく人の眼に着かないやうに後列の一脚に腰を下した。

十八

自分は心のうちで三澤を豫期しながら四方を見渡したが彼の姿は何處にも見えなかつた。尤も見所は正面の外左右兩側面にもあつた。自分は玄關から左へ突き當つて右へ折れて金屏風の立てある前を通つて正面席に案内されたのである。自分の前には紋付の女が二人居た。後にはカーキ色の軍服を着けた士官が二人居た。その外六七人其處此處に散點してゐた。

自分から一席置いて隣の二人連は、舞臺の正面に掛つてゐる幕の話をしてゐた。それには雅樂に何の縁故もなさうに見える變な紋が、堅に何行も染め出されてゐた。

「あれが織田信長の紋ですよ。信長が王室の式徴を慨いて、あの幕を献上したといふのが始まりで、それから以後は必ずあの木瓜の紋の付いた幕を張る事になつてゐるんださうです」幕の上下は紫地に金の唐草の模様を置いた縁で包んであつた。

幕の前を見ると、真中に太鼓が据ゑてあつた。その太鼓には緑や金や赤の美しい彩色が施されてあつた。さうして薄くて丸い棹の中に入れてあつた。左の端には火熨斗位の大きさの鐘が矢張り棹の中に釣るしてあつた。其外には琴が二面あつた。琵琶も二面あつた。

樂器の前は青い毛氈で敷き詰められた舞をまふ所になつてゐた。構造は能のそのやうに、三方の見所からは全く切り離されてゐた。さうして其途切れた四五尺の空間からは日も射し風も通ふやうに出来てゐた。

自分が物珍らしさうに此様子を見てゐるうちに、観客は一人二人と絶えず集まつて來た。其中には自分がある音楽會で顔だけ覺えたNといふ侯爵もゐた。「今日は教育會があるので來られない」と細君の事か何かを、傍にゐた坊主頭の丸々と肥た小さい人に話してゐた。此丸い小さな人がKといふ公爵である事を、自分は後で三澤から教はつた。

其三澤は舞樂の始まるやつと五六分前にフロツコートで遣つて來て、入口の金屏風の所でしばらく觀覽席を見渡しながらか躑躅してゐたが、自分の顔を見付けけるや否や、すぐ傍へ來て腰を掛けた。

人行

彼と前後して一人の脊の高い若い男が、年頃の女を二人連れて、矢張正面席へ這入つて来た。男はフロックコートを着てゐた。女は無論紋付であつた。其男と伴の女の一人が顔立から云つて能く似てゐるので、自分はすぐ彼等の兄妹である事を覺つた。彼等は人の頭を五六列越して、三澤と挨拶を交換した。男の顔には出来る丈の愛嬌が湛へられた。女は心持顔を赤くした。三澤はわざ／＼腰を浮かして起立した。婦人は大抵前の方に席を占めるので、彼等は遂に自分達の傍へは來なかつた。

「あれが僕の妻になるべき人だ」と三澤は小聲で自分に告げた。自分は腹の中で、あの夢のやうな大きい黒い眼の所有者であつた精神病のお嬢さんと、自分の二三間前に今席を取つた色澤の好いお嬢さんとを比較した。彼女は自分にたゞ黒い髪と白い襟足とを見せて坐つてゐた。それも人の影に遮られて自由には見られなかつた。

「もう一人の女ね」と三澤が又小聲で云ひ掛けた。それから彼は突然ポケットへ手を入れて、白い紙片と万年筆を取り出した。彼はすぐそれへ何か書き始めた。正面の舞臺にはもう樂人が現はれた。

十九

彼等は帽子とも頭巾とも名の付けやうのない奇抜なものを被つてゐた。謡曲の富士太鼓を知つてゐた自分は、大方これが鳥兜といふものだらうと推察した。首から下も被りものと同じく現代を超越してゐた。彼等は錦で作つた社杯のやうなものを着てゐた。其社杯には骨がないので肩のあたりは柔かな線でびたりと身體に付いてゐた。袖には白の先へ幅三寸位の赤い絹が縫足してあつた。彼等はみな白の括り袴を穿いてゐた。さうして一様に胡坐をかいた。

三澤は膝の上で何か書き掛けた白い紙を苦茶々々にした。自分は其苦茶々々になつた紙の塊りを横から眺めた。彼は一言の説明も與へずに正面を見た。青い毛氈の上に左の帳の影から現はれたものは鉢を有つてゐた。是も管絃を奏する人と同じく錦の袖無を着てゐた。

三澤は何時迄経つても「もう一人の女はね」の續きを云はなかつた。觀覽席にゐるものは悉く靜肅であつた。隣同志で話をするのさへ憚られた。自分は仕方なしに催促を我慢した。三澤も空とぼけて澄ましてゐた。彼は自分と同じやうに此處へは始めて顔を出したので、少し硬くなつ

てゐるらしかつた。

舞は謹慎な見物の前に、既定のプログラム通り、單調で上品な手足の運動を飽きもせずに行き進んで行つた。けれども彼等の服装は、題の改まる毎に、閑雅な上代の色彩を、代る／＼自分達の眼に映しつゝ過ぎた。あるものは冠に櫻の花を挿してゐた。紗の大きな袖の下から燃えるやうな五色の紋を透かせてゐた。黄金作の太刀も佩いてゐた。あるものは袖口を括つた朱色の着物の上に、唐錦のちやん／＼を膝のあたり迄垂らして、丸で錦に包まれた獵人のやうに見えた。あるものは簀に似た青い衣をばら／＼に着て、同じ青い色の笠を腰に下げてゐた。――凡てが夢のやうであつた。吾々の祖先が残して行つた遠い記念の匂ひがした。みんな有難さうな顔をしてそれを觀てゐた。三澤も自分も狐に撮まゝれた氣味で坐つてゐた。

舞樂が一段落ついた時に、御茶を上げますと誰かゞ云つたので周圍の人は席を立つて別室に動き始めた。其處へ先刻三澤と約束の整つたといふ女の兄さんが來て、物馴れた口調で彼と話した。彼は斯ういふ方面に關係のある男と見えて、當日案内を受けた誰彼を能く知つてゐた。三澤と自分はこの人から今迄そこいらにゐた華族や高官や名士の名を教へて貰つた。

別室には珈琲とカステラとチョコレートとサンドイツがあつた。普通の會の時のやうに、無作法な振舞は見受られなかつたけれども、それでも多少込み合ふので、女は坐つたなり席を立たないのがあつた。三澤と彼の知人は、菓子と珈琲を盆の上に載せて、わざ／＼二人の御嬢さんの所へ持つて行つた。自分はチョコレートと銀紙を剝しながら、敷居の上に立つて、遠くから其様子を偷むやうに眺めてゐた。

三澤の細君になるべき人は御辭義をして、珈琲茶碗を取つたが、菓子には手を觸れなかつた。所謂「もう一人の女」は其珈琲茶碗にさへ容易く手を出さなかつた。三澤は盆を持つた儘、引く事も出來ず進む事も出來ない態度で立つてゐた。女の顔が先刻見た時よりも子供々々した苦痛の表情に充ちてゐた。

二十

人行

自分先刻から「もう一人の女」に特別の注意を拂つてゐた。それには三澤の様子や態度が有力な原因となつて働いてゐたに違ないが、單獨に云つても、彼女は自分の視線を引着けるに足る

程な好い器量を有つてゐたのである。自分は彼女と三澤の細君になるべき人との後姿を、舞樂の相間々々に絶えず眺めた。彼等は自分の坐つてゐる所から、ことさらな方向に眸子を轉ずる事なしに、自然と見られるやうに都合の好い地位に坐つてゐた。

斯うして首筋ばかり眺めてゐた自分は今比較的自由な場所に立つて、彼等の顔立を筋違に見始めた。或は正面に動く機會が來るかも知れないと思つた時、自分はチヨコレートを頬張りながら、暗に其瞬間を捉へる注意を怠らなかつた。けれども其女も三澤の意中の人も、遂に此方に向かなかつた。自分はたゞ彼等の容貌を三分の二丈側面から遠くに望んだ。

其内三澤は又盆を持つて此方へ歸つて來た。自分の傍を通る時、彼は微笑しながら、「何うだい」と云つた。自分はたゞ「御苦勞さま」と挨拶した。後から例の脊の高い兄さんが遣つて來た。

「何うです、彼方へ入らして煙草でも御呑みになつちや。喫煙室はあすこの突き當りです」
自分と三澤との間に緒口の付き掛けた談話は是で又流れて仕舞つた。二人は彼に導かれて喫煙室に這入つた。煙と男子に占領された比較的狭い其室は思つたより賑かであつた。

自分は其一隅にたゞ一人の知つた顔を見出した。それは俗人の姓を有つた眼の大きい男であつ

た。ある協會の主要な一員として、舞臺の上で巧みに其大きな眼を利用する男であつた。彼は臺詞を使ふ時のやうな深い聲で、誰かと話してゐたが、殆んど自分達と入れ代り位に、喫煙室を出て行つた。

「とう／＼役者になつたんださうだ」

「儲かるのかね」

「え、儲かるんだらう」

「此間何とかを遣るといふ事が新聞に出てゐたが、あの人なんですか」

「え、さうださうです」

彼の去つた後で、室の中央にゐた三人の男は斯んな話をしてゐた。三澤の知人は自分達に其三人の名を教へて呉れた。其うちの二人は公爵で、一人は伯爵であつた。さうして三人が三人とも公卿出の華族であつた。彼等の會話から察すると、三人ながら殆ど劇といふ藝術に對して何の知識も興味も有つてゐないやうであつた。

我々は又元の席に歸つて二三番の歐洲樂を聞いた後、漸く五時頃になつて雅樂所を出た。周圍

に人が居なくなつた時、三澤は漸く「もう一人の女」の事に就いて語り始めた。彼の考へは自分が最初から推察した通りであつた。

「何うだい、氣に入らないかね」

「顔は好いね」

「顔丈かい」

「あとは分らないが、然し少し舊式ぢやないか。何でも遠慮さへすればそれが禮儀だと思つてゐるやうだね」

「家庭が家庭だからな。然しあゝいふのが間違がないんだよ」

二人は土手に沿うて歩いた。土手の上の松が雨を含んで蒼黒く空に映つた。

二十一

自分は三澤と飽かず女の話をした。彼の娶るべき人は宮内省に關係のある役人の娘であつた。其伴侶は彼女と仲の好い友達であつた。三澤は彼女と打ち合せをして、とくに自分のために其人

を誘ひ出したのであつた。自分は其人の家族やら地位やら教育やらについて得らるゝ限りの知識を彼から供給して貰つた。

自分は本末を顛倒した。雅樂所で三澤に會ふ迄は、Hさんと兄とが此夏一所にするといふ旅行の件を、其日の問題として暗に胸の中に疊み込んでゐた。雅樂所を出る時は、それがほんの付けたりになつて仕舞つた。自分は愈彼に別れる間際になつて、始めて四つ角の隅に立つた。

「兄の事も今日君に會つたらよく聞かうと思つてゐたんだが、愈Hさんの云ふ通りになつたんだね」

「Hさんはわざ／＼僕を呼び寄せてさう云つた位なんだから間違はないさ。大丈夫だよ」

「何處へ行くんだらう」

「そりや知らない。——何處だつて好いちやないか、行きさいすりあ」

遠くから見えてゐる三澤の眼には、兄の運命が最初から夫程の問題になつてゐなかつた。

「それより片つ方のはうを積極的にとし／＼進行させようぢやないか」

自分は一人下宿へ歸る途々、矢張兄と嫂の事を考へない譯に行かなかつた。然し其日會つた女

の事も或は彼等以上に考へたかも知れない。自分は彼女と一言も口を交へなかつた。自分は遂に彼女の聲を聞き得なかつた。三澤は自然が二人を視線の通ふ一室に會合させたといふ事實以外に、わざとらしい痕迹を見せるのは厭だと言つて、紹介も何もしなかつた。彼はさう云つて後から自分に斷つた。彼の遣口は、彼女に取つても自分に取つても、面倒や迷惑の起り得ない程單簡で淡泊なものであつた。然し夫だから物足りなかつた。自分はもう少し何とかして貰ひたかつた。「然し君の意志が解らなかつたから」と三澤は辯解した。さう云はれて見ると、さうでもあつた。自分はあれ以上、女を目掛けて進んで行く考へはなかつたのだから。

夫から二三日は女の顔を時々頭の中で見た。然しそれが爲に、又會ひたいの焦慮のといふ熱は起らなかつた。その當日のはつとした色彩が剝けて行くに連れて、番町の方が依然として重要な問題になつて來た。自分はなまじい遠くから女の匂ひを嗅いだ反動として、却てぢぢむさくなつた。事務所の往復に、ざら／＼した頬を撫で、見て、手もなく電車に乗つた貉の様なものだと思ひたりした。

一週間程経て母から電話がかゝつた。彼女は電話口へ出て、昨日Hさんが遊びに來た事を告げた。嫂が風邪氣なので、彼女が代理として饗應の席に出たら、Hさんが兄と一所に旅行する話を始めたと言つた。彼女は喜ばしうな調子で、自分に禮を述べた。父からも宜しくとの事であつた。自分は「いゝ案排でした」と答へた。

自分は其晩色々考へた。自分は旅行が兄のために有利であると認めたから、Hさんを煩はして、是丈の手續を運んだのであるが、眞底を自白すると、自分の最も苦に病んでゐるのは、兄の自分に對する思はくであつた。彼は自分を何う見てゐるだらうか。どの位の程度に自分を憎んでゐるだらう、又疑つてゐるだらう。其處が一番知りたかつた。従つて自分の氣になるのは未來の兄であると同時に現在の兄であつた。久しく彼と會見の路を絶たれた自分は、其現在の兄に關する直接の知識を殆んど有たなかつた。

二十二

人行

自分は旅行に出る前のHさんに一應會つて置く必要を感じた。此方で頼んだ事を順に運んで呉れた好意に對して、禮を云はなければ濟まない義理も控へてゐた。

自分は事務所の歸り掛に又彼の玄關に立つて名刺を出した。取次が奥へ這入つたかと思ふと、彼は例のむく／＼した丸い體軀を、自分の前に運んで來た。

「實は今あしたの講義で苦しんでゐる所なんですがね。もし急用でなければ、今日は御免を蒙りたい」

學者の生活に氣の付なかつた自分は、Hさんの此言葉で、急に兄の日常を想ひ起した。彼等の書齋に立籠るのは、必ずしも家庭や社會に對する謀反とも限らなかつた。自分はHさんに都合の好い日を聞いて、又出直す事にした。

「ぢや御氣の毒だが、さうして下さい。成るべく早く講義を切り上げて、兄さんと一所に旅行しよう」と云ふ譯なんだからね」

自分はHさんの前に丁寧な頭を下げなければならなかつた。

彼の家を再度訪問したのは、夫から又二三日経つた梅雨晴の夕方であつた。肥つた彼は暑いと云つて浴衣の胸を胃の上部迄開け放つて坐つてゐた。

「さあ何處へ行くかね。まだ海とも山とも極めてゐないんだが」

Hさん丈あつて行く先杯は頓と苦にしてゐないらしかつた。自分も夫には無頓着であつた。けれども……。

「少しそれに就て御願があるんですが」

家庭の事情の一般は、此間三澤と來た時、既にHさんの耳に入れて仕舞つた。然し兄と自分との間に横たはる一種特別な關係に就ては、まだ一言も彼に告げてゐなかつた。然し夫は何時迄經つてもHさんの前で自分から打ち明るべき性質のものでないと自分は考へてゐた。親しい三澤の知識ですら、其處になると殆んど臆測に過ぎなかつた。Hさんは三澤から其臆測の知識を間接に受けてゐるかも知れなかつたけれども、此方から露骨に切り出さない以上、その信偽も程度も、丸で確める譯に行かなかつた。

自分は兄から今何う見られてゐるか、何う思はれてゐるか、それが知りたくつて仕方がなかつた。それを知るために、此際Hさんの助を借りようとするれば、勢ひ萬事を彼の前に投げ出して見せなければならなかつた。自分が三澤に何事も云はずに、恰も彼を出し抜いた様な態度で、たつた一人斯うしてHさんを訪問するのも、實は其用事の真相を成るべく他に知らせたくないからで

あつた。然し三澤に對してさへ、良心に氣兼ねをするやうな用事の真相なら、それをHさんの前で云はれる筈がなかつた。

自分は已を得ず特殊な問題を一般的に崩して仕舞つた。

「甚だ御迷惑かも知れませんが、兄と一所に旅行される間、兄の舉動なり言語なり、思想なり感情なりに就いて、貴方の御觀察になつた所を、出来る丈詳しく書いて報知して頂く譯には行きませぬまいか。その邊が明瞭になると、宅でも兄の取扱上大變便宜を得るだらうと思ふんですが」

「左右さね。絶対に出来ない事もないが、ちつと六づかしさうですね。だいち時間がないぢやないか、君、そんな事をする。よし時間があつても、必要がないだらう。それより僕等が旅行から歸つたらゆつくり聞きに來たら好いちやありませんか」

二十三

Hさんの云ふ所は尤もであつた。自分は下を向いてしばらく黙つてゐたが、とうとう嘘を吐いた。

「實は父や母が心配して、出来るなら旅行中の模様を、経過の一段落毎に承知したいと云ふんですが……」

自分は困つた顔をした。Hさんは笑ひ出した。

「君そんなに心配する事はありませんよ。大丈夫だよ、僕が受け合ふよ」

「然し年寄ですから……」

「困るね、それぢや。だから年寄は嫌ひなんだ。宅へ行つて左右云ひ玉へな、大丈夫だつて」

「何とか好い工夫はないもんでせうか。貴方の御迷惑にならないで、さうして、父や母を満足させる様な」

Hさんは又によろ／＼笑つてゐた。

「そんな重寶な工夫があるものかね、君。——然し折角の御依頼だから斯うしよう。もし旅先で報道するに足るやうな事が起つたら、君の所へ手紙を上げると。もし手紙が行かなかつたら、平生の通りだと思つて安心してゐると。それで可からう」

自分は是より以上Hさんに望む事は出来なかつた。

「それで結構です。然し出来事といふ意味を俗にいふ不慮の出来事と取らずに、貴方が御觀察になる兄の感情なり思想のうちで、是は尋常でないと御氣付になつたものに應用して頂けませうか」

「中々面倒だね、事が。然しまあ宜いや、さう爲てもいい」

「夫からことによると、僕の事だの母の事だの、家庭の事などが兄の口の上るかも知れませんが、それを御遠慮なく一々聞かして頂きたいと思ひますが」

「うん、そりや差支ない限り知らせて上げませう」

「差支があつても構はないから聞かして戴きたい。それでないと宅のものが困りますから」

Hさんは黙つて煙草を吹かし出した。自分は弱輩の癖に多少云ひ過ぎた事に氣が付いた。手持無沙汰の感じが強く頭に上つた。Hさんは庭の方を見てゐた。其隅に秋田から家主が持つて來て植たといふ大きな蔦が五六本あつた。雨上りの初夏の空が何時迄も明るい光を地の上に投げてゐるので、その太い蔦の莖がすい／＼と薄暗い中に青く描かれてゐた。

「あそこへ大きな蔦が出るんですよ」とHさんが云つた。

しばらく世間話をした後で、自分は暗くならないうちに席を立たうとした。

「君の縁談は何うなりました。此間三澤が來て、好いの見付けて遣つたつて得意になつてゐましたよ」

「え、三澤も随分世話好きですから」

「所が萬更世話好きで遣つてるんでもないやうですよ。だから君も好い加減に貰つちまつたら好いぢやありませんか。器量は悪くないつて話ぢやないか。君には氣に入らんのかね」

「氣に入らんのぢやありません」

Hさんは「はあ矢つ張氣に入つたのかい」と云つて笑ひ出した。自分はHさんの門を出て、あの事も早く何うかしなければ、三澤に對して義理が悪いと考へた。然し兄の問題が一段落でも片付いて呉れない以上、到底其方へ向ける心の餘裕は出なかつた。いつそ一思ひにあの女の方から惚れ込んで呉れたならなどと思つても見た。

自分は又三澤を尋ねた。けれども腹を極めてから尋ねた譯でないから、實際上何んな歩調も前に動かす気にはなれなかつた。自分の態度は何處迄も愚圖々々であつた。さうして唯漫然と其女の話をした。

「何うするね」

斯う聞かれると、結局要領を得た何の挨拶も出来なかつた。

「僕は職業の上ではふわ／＼して浪人のやうに暮してゐるが、家庭の人としてなら、是でも一定の方針に支配されて、着々固まつて行きつゝある積だ。所が君は丸で反對だね。一家の主人となるときか、他の夫になるとかいふ方面には、故意に意志の働きを鈍らせる癖に、職業の問題になると、手つ取早く片付けて、ちやんと落付いてゐるんだから」

「あんまり落付いても居ないさ」

自分は大阪の岡田から受取つた手紙の中に、相應な位地が彼地にあるから來ないかといふ勧誘があつたので、ことによつたら今の事務所を飛び出さうかと考へてゐた。

「ついで此間迄は洋行するつて頻りに騒いでゐたぢやないか」

三澤は自分の矛盾を追窮した。自分には西洋も大阪も變化として此際大した相違もなかつた。

「さう萬事的にならなくつちや駄目だ。僕丈君の結婚問題を眞面目に考へるのは馬鹿々々しい譯だ。断つちまはう」

三澤は大分癩に障つたらしく見えた。自分は又自分が癩に障てならなかつた。

「一體先方では何ういふんだ。君は僕ばかり責めるがね、僕には向ふの意志が少しも解らないぢやないか」

「解る筈がないよ。まだ何にも話してないんだもの」

三澤は少し激してゐた。さうして激するのが尤もであつた。彼は女の父兄にも女自身にも、自分の事をまだ一口も告げてゐなかつた。何う間違つても彼等の體面に障りやうのない事情の下に、女と自分を御互の視線の通ふ範圍内に置いた丈であつた。彼の處置には少しも人工的な痕迹を留めない、殆んど自然其儘の利用に過ぎないといふのが彼の大きいなる誇りであつた。

「君の考へが纏まらない以上は何うする事も出来ないよ」

「ぢやもう少し考へて見よう」

三澤は焦慮たさうであつた。自分も自分が不愉快であつた。Hさんと兄が一所の汽車で東京を去つたのは、自分が三澤の所へ出掛けてから、一週間と経たないうちであつた。自分は彼等の立つ時刻も日限も知らずにゐた。三澤からもHさんからも何の通知を受取らなかつた自分は、家からの電話で始めてそれを聞いた。其時電話口へは思ひ掛なく嫂が出て來た。

「兄さんは今朝お立よ。お父さんが貴方へ知らせして置けと仰しやるから、一寸御呼び申しました」

嫂の言葉は少し改まつてゐた。

「Hさんと一所なんでせうね」

「えゝ」

「何處へ行つたんですか」

「何でも伊豆の海岸を廻るとかいふ御話でした」

「ぢや船ですか」

「いゝえ矢張り新橋から……」

二十五

其日自分は下宿へ歸らずに、事務所からすぐ番町へ廻つた。昨日迄恐れて近寄らなかつたのに、兄の立出と聞くや否や、すぐ其方へ足を向けるのだから、自分の行爲は餘りに現金過ぎた。けれども自分はそれを隠す氣もなかつた。隠さなければ濟まない人は、宅に一人も居ないやうに思はれた。

茶の間には嫂が雑誌の口繪を見てゐた。

「今朝程は失禮」

「おや吃驚したわ、誰かと思つたら、二郎さん。今京橋から御歸り？」

「えゝ、暑くなりましたね」

人行
自分は手帛を出して顔を拭いた。それから上着を脱いで疊の上へ放り出した。嫂は團扇を取つて呉れた。

「御父さんは？」

「御父さんは御留守よ。今日は築地で何かあるんですつて」
「精養軒？」

「ぢやないでせう。多分外の御茶屋だと思ふんだけども」

「お母さんは？」

「お母さんは今御風呂」

「お重は？」

「お重さんも……」

「お重さん……」

「風呂ですか」

「いゝえ、居ないの」

下女が来て氷の中へ苺を入れるかレモンを入れるかと尋ねた。

「宅ぢやもう氷を取るんですか」

「え、二三日前から冷蔵庫を使つてゐるのよ」

氣の所爲か嫂は此前見た時よりも少し窶れてゐた。頬の肉が心持減つたらしかつた。それが夕方がたくわらせんの光線の具合で、顔かほを動かす時に、ちらり／＼と自分の眼めを掠めた。彼女は左の頬ほを縁側えんがはに向けて坐つてゐたのである。

「兄さんは夫でも能く思ひ切つて旅に出掛けましたね。僕は殊ことによると今度も亦延またのばすかも知れないと思つてたんだが」

「延のばしやなさらないわよ」

嫂あにやめは斯ういふ時に下したを向いた。さうして何時いつもよりも一層落付いた沈んだ低い聲こゑを出した。

「そりや兄にいさんは義理堅ぎりがたいから、Hさんと約束やそくした以上いじやう、それを實行じつかちする積つもりだつたには違ちがひないけれども……」

人行

「そんな意味ぢやないのよ。そんな意味ぢやなくつて、さうして延のばさないのよ」
自分じぶんはほかんとして彼女かのぢよの顔かほを見た。
「ぢや何どんな意味いみで延のばさないんです」

「何んな意味つて、——解つてるぢやありませんか」
自分には解らなかつた。

「僕には解らない」

「兄さんは妾に愛想を盡かしてゐるのよ」

「愛想づかしに旅行したといふんですか」

「いゝえ、愛想を盡かして仕舞つたから、それで旅行に出掛たといふのよ。つまり妾を妻と思つてゐらつしやらないのよ」

「だから……」

「だから妾の事なんか何うでも構はないのよ。だから旅に出掛けたのよ」

嫂は是で黙つて仕舞つた。自分も何とも云はなかつた。其處へ母が風呂から上つて來た。

「おや何時來たの」

母は二人坐つてゐる所を見て厭な顔をした。

二十六

「もう好い加減に芳江を起さないと又晩に寝ないで困るよ」

嫂は黙つて起つた。

「起きたらすぐ湯に入れて御遣んなさいよ」

「えゝ」

彼女の後姿は廊下を曲つて消えた。

「芳江は晝寐ですか、どうれで靜だと思つた」

「先刻何だか拗ねて泣いてたら、夫限寐ちまつたんだよ。何ぼなんでも、もう五時だから、好い加減に起して遣らなくつちや……」

母は不平らしい顔をしてゐた。

自分は其日珍しく宅の食卓に向つて、晚餐の箸を取つた。築地の料理屋か待合へ呼ばれたといふ父は、無論歸らなかつたけれども、お重は豫定通り戻つて來た。

「おい早く来て坐らないか。みんな御前の湯から上るのを待つてたんだ」
お重は縁側へべたりと尻を着けて團扇で浴衣の胸へ風を入れてゐた。

「そんなに急ぎ立てなくつたつて可かないの。會に來たお客さまの癖に」

お重はつんどしてわざと鼻の先の八つ手の方を向いてゐた。母は又始まつたといふ笑の裡に自分を見た。自分は又調戲たくなつた。

「御客さまだと思ふなら、そんな大きなお尻を向けないで、早く此處へ來てお坐りよ」

「蒼蠅いわよ」

「一體此暑いのに、一人で何處をほつつき歩いてたんだい」

「何處でも餘計な御世話よ。ほつつき歩くだなんて、第一言葉使からして貴方は下品よ。――」

好いわ、今日坂田さんの所へ行つて、兄さんの祕密をすつかり聞いて來たから」

お重は兄の事を大兄さん、自分の事をたゞ兄さんと呼んでゐた。始めはちい兄さんと云つたのだが、其ちいを聞いたたびに妙な不快を感じるので、自分はとうとうちい丈を取らして仕舞つた。

「好くつてみんなに話しても」

お重は湯で火照つた顔をぐるりと自分の方に向けた。自分は瞬きを二つ續けざまにした。

「だつて御前は今兄さんの祕密だと明言したぢやないか」

「えゝ祕密よ」

「祕密なら話して可くないに極つてぢやないか」

「それを話すから面白いのよ」

自分はお重の無鐵砲が、何を云出すか分らないと思つて腹の中では辟易した。

「お重御前は論理學でいふコントラヂクシオン、イン、タームス、といふ事を知らないだらう」

「可くつてよ。そんな高慢ちきな英語なんか使つて、他が知らないと思つて」

「もう二人とも止しにお爲よ。何だね面白くもない、十五六の子供ぢやあるまいし」

母はとうとう二人を窘なめた。自分もそれを好い機にすぐ舌戦を切り上げた。お重も團扇を縁側へ投げ出して大人らしく食卓に着いた。

局面が一轉した後なので、祕密らしい祕密は、食事中遂にお重の口から洩れる機會がなかつた。母も嫂も丸でそれには取り合ふ氣色を見せなかつた。平吉といふ男が裏から出て來て、庭に水を

打つた。「まださう燥いてゐないんだから、好い加減にしてお置き」と母が云つてゐた。

二十七

其晩番町を出たのは燈火が點いてまだ間もない宵の口であつた。それでも飯を濟ましてから約一時間半程は、其處へ坐り込だ儘、みんなを相手に喋舌つてゐた。

自分は其一時間半の間に、とう／＼お重から例の祕密をあばれる羽目に陥つた。然しそれが自分に取つては、祕密でも何でもない例の結婚問題だつたので、自分は却て安心した。

「御母さん、兄さんは妾達に隠れて此間見合をなすつたんですつて」
「隠れて見合なんかするものか」

自分は母がまだ何とも云はないうちにお重の言葉を遮つた。

「いゝえ慥な筋からちやんと聞いて來たんだから、いくら白ばつくれるも最う駄目よ」

慥な筋といふ様な一種の言葉が、お重の口から出るのを聞いたとき、自分は思はず苦笑した。
「馬鹿だなお前は」

「馬鹿でも可いわよ」

お重は六月二日の出來事を母や嫂に向つてべら／＼喋舌り出した。それが中々精しいので自分分は少し驚いた。何處から其知識を得て來たのだらうといふ好奇心が強く自分の反問を促した。けれどもお重はたゞ意地の悪い微笑を洩らすのみで、決して出所を告げなかつた。

「兄さんが妾達に黙つてゐるのは、屹度打ち明けて云ひ悪い譯があるからなのよ。ね、さうでせう、兄さん」

お重は自分の好奇心を満足させないのみか、却て向ふから此方を撻りにかゝつた。自分は「何うでも好いや」と云つた。母から眞面目に事の顛末を聞かれた時、自分は簡單に有の儘を答へた。「たゞ夫丈の事なんです。しかも向ぢや全く知らないんだから其積で居て下さい。お重見たいに好い加減な事を云ひ觸らすと、僕は何うでも構はんにした所で、先方が迷惑するかも知れませんが」

母は先方が迷惑がる筈がないといふ顔付で、無暗に細かい質問を始めた。然し財産が何の位あるんだらうとか、親類に貧乏人があるだらうかとか、或は悪い病氣の系統を引いてゐやしなから

うかと云ふやうな事になると、自分には丸で答へられなかつた。のみならず仕舞には聞くのさへ面倒で厭になつて来た。自分はとうとう逃げ出すやうにして番町を出た。

自分が其夜母から色々な質問を掛けられてゐる間、嫂は始終同じ席にゐたが、此問題に關しては殆ど一言も口を開かなかつた。母も彼女に向つてつひぞ相談がましい言葉を掛けなかつた。二人の此態度が、二人の氣質をよく代表してゐた。然しそれは單に氣質の相違から許來た一種の對照とも思へなかつた。嫂は全くの局外者らしい位地を守るためか何だか、始終芳江のおもりに氣を取られ勝に見えた。日が暮れさへすればすぐ寐かされる習慣の芳江は、晝寐を貪り過ぎた結果として、其晩はとうとう自分が歸る迄蚊帳の中へ這入らなかつた。

自分は下宿へ歸つて、自分の室の暑苦しいのを意外に感じた。わざと電氣燈を消して暗い所に黙つて坐つてゐた。今朝立つた兄は今日何處で泊るだらう。Hさんは今夜彼と何んな話をするだらう。鷹揚なHさんの顔が自然と眼の前に浮かんだ。それと共に瘠せた兄の頬に刻まれた久し振の笑が見えた。

二十八

其翌日からHさんの手紙が心待ち受けられた。自分は一日、二日、三日と指を折つて日取を勘定し始めた。けれどもHさんからは何の音信もなかつた。繪端書一枚さへ來なかつた。自分は失望した。Hさんに責任を忘れるやうな輕薄はなかつた。然し此方の豫期通り律義にそれを果して呉れない程の大悠はあつた。自分は自然たい部に屬する人間の一人として遠くから彼を眺めた。

人行

すると二人が立つてから丁度十一日目の晩に、重い封書が始めて自分の手に落ちた。Hさんは罨の細かい西洋紙へ、萬年筆で一面に何か書いて來た。頁の數から云つても、二時間や三時間で出来る仕事ではなかつた。自分は机の前に縛り付けられた人形の様な姿勢で、それを讀み始めた。自分の眼には、この小さな黒い字の一點一劃も讀み落すまいといふ決心が、焰の如く輝いた。自分の心は頁の上に釘付にされた。しかも雪を行く櫓のやうに、其上を滑つて行つた。要するに自分分はHさんの手紙の最初の頁の第一行から讀み始めて、最後の頁の最終の文句に至る迄に、何の

位の時間が要つたか丸で知らなかつた。

手紙は下のやうに書いてあつた。

「長野君を誘つて旅へ出るとき、あなたから頼まれた事を、一旦引き受けるには引き受けたが、いざとなつて見ると、到底實行は出来まい、また出来てもする必要があるまい、もしくは必要と不必要に拘はらず、するのは好もしい事ではなからう、——斯ういふ考へでゐました。旅行を始めから一日二日は、此三つの事情の凡てか或は幾分か常に働くので、是では折角の約束も反古にしなければならぬといふ氣が強くなりました。それが三日四日となつた時、少し考へさせられました。五日六日と日を重ねるに従つて、考へる許でなく、約束通りあなたに手紙を上げるのが、或は必要かも知れないと思ふやうになりました。尤も此處にいふ必要といふ意味が、あなたと私とで、大分違ふかも知れませんが、それは此手紙を仕舞迄御讀みになれば解る事ですから、説明はしません。それから當初私の抱いた好もしくないといふ倫理上の感じ、是はいくら日數を経過しても取る譯には行きませんが、片方にある必要の度が、自然夫を抑へ付ける程強くなつて來た事も亦確であります。恐らく手紙を書いてゐる暇があるまい。——此故障文は始めあな

たに申上げた通り何處迄も付け纏つて離れませんでした。我々二人は一所の室に寝ます、一所の室で飯を食ひます、散歩に出る時も一所です、湯も風呂場の構造が許す限りは、一所に這入りま

す。かう數へ立て、見ると、別々に行動するのは、まあ廁に上る時位なものなのです。無論我々二人は朝から晩迄のべつに喋舌り續けてゐる譯ではありません。御互が勝手な書物を手にしてゐる時もあります、黙つて寐轉んでゐる事もあります。然し現に其人の居る前で、其人の事を知らん顔で書いて、さうして夫をそつと他に知らせるのは一寸私にとつては出来悪いのです。書くべき必要を認め出した私も、是には弱りました。いくら書く機會を見付けよう見付け

ようと思つても、そんな機會の出て來る筈がないのですから。然し偶然は遂に私の手を導いて、私に私の必要と認める仕事をさせるやうにして呉れました。私はそれ程兄さんに氣兼ねせず、此手紙を書き初めました。さうして同じ状態の下に、それを書き終る事を希望します。

二十九

我々は二三日前から此紅が谷の奥に來て、疲れた身體を谷と谷の間に放り出しました。居る所

は私の親戚の有つてゐる小さい別荘です。所有主は八月にならないと東京を離れる事が六づかし
いので、其前なら何時でも君方に用立て宜しいと云つた言葉を、圖らず旅行中に利用する譯にな
つたのであります。

別荘といふと大變人間が好いやうですが、其實は甚だ見苦しい手狭なもので、構へからいふと、
丁度東京の場末にある四五十圓の安官吏の住居です。然し田舎丈に邸内の地面には多少の餘裕が
あります。庭だか菜園だか分らないものが、軒から爪下りに向ふの垣根迄續いてゐます。其の垣
には珊瑚樹の實が一面に結つてゐて、葉越に隣の葺屋根が四半分程見えます。

同じ軒の下から谷を隔て、向ふの山も手に取るやうに見えます。此山全體がある伯爵の別荘地
で、時には浴衣の色が樹の間から見えたり、女の聲が崖の上で響いたりします。其崖の頂には高
い松が空を突くやうに聳えてゐます。我々は低い軒の下から朝夕此松を見上るのを、高尚な課業
のやうに心得て暮してゐます。

今迄通つて來たうちで、君の兄さんには此處が一番氣に入つたやうです。それには色々な意味
があるかも知れませんが、二人ぎりて獨立した一軒の家の主人になり濟まされたといふ氣分が、

人慣れない兄さんの胸に一種の落付を興へるのが、其大原因だらうと思ひます。今迄何處へ泊つ
てもよく寐られなかつた兄さんは、此處へ來た晩からよく寐ます。現に今私がかうやつて萬年
筆を走らしてゐる間も、ぐうぐう寐てゐます。

もう一つ此處へ來てから偶然の恩恵に浴したと思ふのは、普通の宿屋のやうに二人が始終膝を
突き合はして、一つ部屋にごろ／＼してゐないで濟む事です。家は今申した通り手狭至極なもの
であります。門を出て右の坂上にある或る長者の拵へた西洋館などに比べると全くの燐寸箱に過
ぎません。それでも垣を圍らして四方から切り離した獨立の一軒家です。窮屈ではあるが間敷は
五つ程あります。兄さんと私は一つ座敷に吊つた一つ蚊帳の中に寐ます。然し宿屋と違つて同じ
時間に起きる必要はありません。片方が起きてても、片方は寐たい丈寐てゐられます。私は兄さん
をそつとして置いて、次の座敷に据ゑてある一閑張の机に向ふ事が出來ます。晝も其通りです。
二人差向ひでゐるのが苦痛になれば、何方かが勝手に姿を隠して、自分に都合のいゝ事を、好な
時間文やります。それから適當な頃に又出て來て顔を見せます。

私は斯ういふ偶然を利用して此手紙を書くのであります。さうして此偶然を思ひ掛なく利用す

る事の出来た自分を、あなたの爲に仕合せと考へます。同時に、それを利用する必要を認め出した自分を、自分のために遺憾だと思ひます。

私のいふ事は順序からいふと日記體に纏まつて居りません。分類からいふと科學的に區別が立たないかも知れません。然しそれは汽車、俵、宿、凡て規則的な仕事を妨げる旅行といふものゝ障害と、平氣で取り掛りにくいといふ其仕事の性質とが、破壊的に働いた結果と思つて頂くより仕方がありません。斷片的にせよ下に述べる丈の事を貴方に報道し得るのが既に私には意外なのであります。全く偶然の御蔭なのであります。

三十

我々は二人とも大した旅行癖のない男です。従つて我々の編み上げた旅程も亦經驗相應に平凡でした。近くて便利な所を人並に廻つて歩けば、夫で目的の大半は達せられる位な考へで、まづ相模伊豆邊をぼんやり心掛ました。

それでも私の方が兄さんよりはまだ増しでした。私は主要な場所と、そこへ行くべき交通機關

とを略承知してゐましたが、兄さんに至つては殆んど地理や方角を超越してゐました。兄さんは國府津が小田原の手前か先か知りませんでした。知らないといふより寧ろ構はないのでせう。是程一方に無頓着な兄さんが、何故人事上のあらゆる方面に、同じ平然たる態度を見せる事が出来ないのかと思ふと、私は實際不思議な感に打たれざるを得ません。然しそれは餘事です。話が逸れると戻り悪くなりますから、成る可く本流を傳つて、筋を離れないやうに進む事にしませう。

我々は始め逗子を基點として出發する事に相談を極めてゐました。所が其朝新橋へ駆け付ける俵の上で、ふと私の考へが變りました。如何に平凡な旅行にしても、眞先に逗子へ行くのは、あまりに平凡過ぎて氣が進まなくなつたのです。私は停車場で兄さんに相談の仕直しを遣りました。私は行程を逆にして、まづ沼津から修善寺へ出て、それから山越に伊東の方へ下りようと云ひました。小田原と國府津の後先さへ知らない兄さんに異存のある筈がないので、我々はすぐ沼津迄の切符を買つて、其儘東海道行の汽車に乗り込みました。

人行
汽車中では報知に値する様な事が別々に起りませんでした。先方へ着いても、風呂へ入つたり、飯を食つたり、茶を飲んだりする間は、是といつて目に着く點もなかつたのです。私は兄さんに

就いて、是はことによると家族の人の参考のために、知らせて置く必要があるかも知れないと思ひ出したのは、其日の晩になつてからであります。

寐るには早過ぎました。話にはもう飽きました。私は旅行中に誰でも経験する一種の徒然に襲はれました。不圖床の間の脇を見ると、其處に重さうな碁盤が一面あつたので、私はすぐそれを室の真中へ持ち出しました。無論兄さんを相手に黑白を争ふつもりでした。貴方は御存じだか何うだか知りませんが、私は學校にゐた時分、是でよく兄さんと碁を打つたものです。其後二人とも申し合せてやうに、びたりと已めて仕舞ひましたが、この場合、二人が持て餘してゐる時間を、面白く過すには碁盤が屈強の道具に違なかつたのです。

兄さんは暫く碁盤を眺めてゐました。さうして置いて「まあ止さう」と云ひました。私は思ひ込んだ勢ひで、「さう云はずに遣らうぢやないか」と押し返しました。夫でも兄さんは「いや、まあ止さう」と云ひます。兄さんの顔を見ると、眼と眉の間に變な表情がありました。それが何の碁なんぞと云つた風の輕蔑又は無頓着を示してゐないので、私は一寸異な心持がしました。然し無理に強ひるのも厭ですから、私はとう／＼一人で碁石を取り上げて、黒と白を打手違

に、盤の上に並べ始めました。兄さんは少しの間それを見てゐました。私が猶黙つて打ち續けて行きますと、兄さんは不意に座を立てて廊下へ出ました。大方便所へでも行つたのだらうと思つた私は、一向兄さんの舉動には注意を拂ひませんでした。

三十一

案の通り兄さんは時を移さず戻つて來ました。さうして突然「遣らう」といふや否や、自分の手から、碁石を挽ぎ取るやうに引つ手繰りました。私は何の氣もつかずに、「よろしい」と答へて、すぐ打ち始めました。我々のは申す迄もなくへボ碁ですから、石を下すのも早いし、勝負の片付くのも雑作はありません。一時間のうちに悠に二番位は始末が出来る位だから、見てゐても局に對つてゐても、間意い思ひは決してないのです。所を兄さんは、その手早く運んで行く碁面を、仕舞迄辛抱して眺めてゐるのは苦痛だと云つて、とう／＼中途で已めて終ひました。私は心持でも悪くなつたのかと思つて心配しましたが、兄さんはたゞ微笑してゐました。

床に入る前になつて、私は始めて兄さんから其時の心理状態の説明を聞きました。兄さんは碁

を打つのは固より、何をするのも厭だつたのださうです。同時に、何かしなくつては居られなかつたのださうです。此矛盾が既に兄さんには苦痛なものでした。兄さんは碁を打ち出せば、屹度碁なんぞ打つてゐられないといふ氣分に襲はれると豫知してゐたのです。けれども又打たずには居られなくなつたのです。それで已を得ず盤に向つたのです。盤に向ふや否や自烈たくなつたのです。仕舞には盤面に散點する黒と白が、自分の頭を悩ます爲に、わざと續いたり離れたり、切れたり合つたりして見せる、怪物のやうに思はれたのださうです。兄さんはもう些とで、盤面を滅茶々に掻き亂して、此魔物を追拂ふ所だつたと云ひました。何事も知らなかつた私は、少し驚き乍ら悪い事をしたと思ひました。

「いや碁に限つた譯ぢやない」と云つて兄さんは、自分の過失を許して呉れました。私は其時兄さんから、兄さんの平生を聞きました。兄さんの態度は碁を中途で已めた時ですら落付いてゐました。上部から見ると何の異状もない兄さんの心持は、恐らくあなた方には理解されてゐないかも知れません。少くとも斯ういふ私には一つの發見でした。

兄さんは書物を讀んでも、理窟を考へても、飯を食つても、散歩をして、二六時中何をして、其處に安住する事が出来ないのださうです。何をしても、こんな事をしてはゐられないといふ氣分に追ひ掛けられるのださうです。

「自分のしてゐる事が、自分の目的になつてゐない程苦しい事はない」と兄さんは云ひます。

「目的でなくつても方便になれば好いぢやないか」と私が云ひます。

「それは結構である。ある目的があればこそ、方便が定められるのだから」と兄さんが答へます。

兄さんの苦しむのは、兄さんが何を何うしても、それが目的にならない許りでなく、方便にもならないと思ふからです。たゞ不安なのです。従つて凝としてゐられないのです。兄さんは落ち付いて寐てゐられないから起きると云ひます。起きると、たゞ起きてゐられないから歩くと云ひます。歩くとたゞ歩いてゐられないから走ると云ひます。既に走け出した以上、何處迄行つても止まれないと云ひます。止まれない許なら好いが刻一刻と速力を増して行かなければならないと云ひます。其極端を想像すると恐ろしいと云ひます。冷汗が出るやうに恐ろしいと云ひます。怖くて堪らないと云ひます。

私は兄さんの説明を聞いて、驚きました。然しさういふ種類の不安を、生れてからまだ一度も経験した事のない私には、理解があつても同情は伴ひませんでした。私は頭痛を知らない人が、割れるやうな痛みを訴へられた時の氣分で、兄さんの話に耳を傾けてゐました。私はしばらく考へました。考へてゐるうちに、人間の運命といふものが臍氣ながら眼の前に浮かんで來ました。私は兄さんの爲に好い慰藉を見出したと思ひました。

「君のいふやうな不安は、人間全體の不安で、何も君一人丈が苦しんでゐるのぢやないと覺れば夫迄ぢやないか。詰りさう流轉して行くのが我々の運命なんだから」

私の此言葉はぼんやりしてゐる許でなく、頗る不快に生温るいものでありました。鋭い兄さんの眼から出る輕侮の一瞥と共に葬られなければなりません。兄さんは斯う云ふのです。

「人間の不安は科學の發展から來る。進んで止まる事を知らない科學は、かつて我々に止まる事を許して呉れた事がない。徒歩から俥、俥から馬車、馬車から汽車、汽車から自動車、それか

ら航空船、それから飛行機と、何處迄行つても休ませて呉れない。何處迄伴れて行かれるか分らない。實に恐ろしい」

「そりや恐ろしい」と私も云ひました。

兄さんは笑ひました。

「君の恐ろしいといふのは、恐ろしいといふ言葉を使つても差支ないといふ意味だらう。實際恐ろしいんぢやないだらう。つまり頭の恐ろしさに過ぎないんだらう。僕のは違ふ。僕のは心臓の恐ろしさだ。脈を打つ活きた恐ろしさだ」

私は兄さんの言葉に一毫も虚偽の分子の交つてゐない事を保證します。然し兄さんの恐ろしさを自分の舌で嘗めて見る事はとても出來ません。

「凡ての人の運命なら、君一人さう恐ろしがる必要がない」と私は云ひました。

「必要がなくても事實がある」と兄さんは答へました。其上下の様な事も云ひました。

「人間全體が幾世紀かの後に到着すべき運命を、僕は僕一人で僕一代のうちに経過しなければならぬから恐ろしい。一代のうちなら未だしもだが、十年間でも、一年間でも、縮めて云へば

一ヶ月間乃至一週間でも、依然として同じ運命を経過しなければならぬから恐ろしい。君は嘘かと思ふかも知れないが、僕の生活の何處を何んな斷片に切つて見ても、たとひ其斷片の長さが一時間だらうと三十分だらうと、それが屹度同じ運命を経過しつゝあるから恐ろしい。要するに僕は人間全體の不安を、自分一人に集めて、そのまた不安を、一刻一分の短時間に煮詰めた恐ろしさを經驗してゐる」

「それは不可ない。もつと氣を樂にしなくつちや」

「不可ない位は自分にも好く解つてゐる」

私は兄さんの前で黙つて煙草を吹かしてゐました。私は心のうちで、何うかして兄さんを此苦痛から救ひ出して上げたいと念じました。私は凡て其他の事を忘れしました。今迄凝と私の顔を見守つてゐた兄さんは、其時突然「君の方が僕より偉い」と云ひました。私は思想の上に於て、兄さんこそ私に優れてゐると感じてゐる際でしたから、此賛辭に對して嬉しいとも難有いとも思ふ氣は起りませんでした。私は矢張黙つて煙草を吹かしてゐました。兄さんは段々落ち付いて來ました。夫から二人とも一つ蚊帳に這入つて寐ました。

三十三

翌日も我々は同じ所に泊つてゐました。朝起き抜けに濱邊を歩いた時、兄さんは眠つてゐる様な深い海を眺めて、「海も斯う静かだと好いね」と喜びました。近頃の兄さんは何でも動かないものが懐かしいのださうです。その意味で水よりも山が氣に入るのでした。氣に入ると云つても、普通の人間が自然を樂しむ時の心持とは少し違ふやうです。それは下に擧げる兄さんの言葉で御解りになるでせう。

「斯うして鬚を生やしたり、洋服を着たり、シガーを銜へたりする所を上部から見ると、如何にも一人前の紳士らしいが、實際僕の心は宿なしの乞食見たやうに朝から晩迄うろ／＼してゐる。二六時中不安に追ひ懸けられてゐる。情ない程落付けない。仕舞には世の中で自分程修養の出來てゐない氣の毒な人間はあるまいと思ふ。さういふ時に、電車の中やなにかで、不圖眼を上げて向ふ側を見ると、如何にも苦のなささうな顔に出つ食はす事がある。自分の眼が、ひとたび其邪念の萌さないほかんとした顔に注ぐ瞬間に、僕はしみ／＼嬉しいといふ刺戟を總身に受ける。僕

の心は早魃に枯れかゝつた稲の穂が膏雨を得たやうに蘇へる。同時に其顔——何も考へてゐない、全く落付拂つた其顔が、大變氣高く見える。眼が下つてゐても、鼻が低くつても、雑作は何うあらうとも、非常に氣高く見える。僕は殆んど宗教心に近い敬虔の念をもつて、其顔の前に跪いて感謝の意を表したくなる。自然に對する僕の態度も全く同じ事だ。昔のやうに唯うつくしいから玩ぶといふ心持は、今の僕には起る餘裕がない」

兄さんは其時電車のなかで偶然見當る尊い顔の部類の中へ、私を加へました。私は思ひも寄らん事だと云つて辭退しました。すると兄さんは眞面目な態度で斯う云ひました。

「君でも一日のうちに、損も得も要らない、善も悪も考へない、たゞ天然の儘の心を天然の儘顔に出してゐる事が、一度や二度はあるだらう。僕の尊いといふのは、其時の君の事を云ふんだ。其時に限るのだ」

兄さんは斯う云はれても覺束なく見える私のために、具體的な證據を示してやるといふ積か、昨夜二人が床に入る前の私を取つて來て其例に引きました。兄さんはあの折談話の機でつい興奮し過ぎたと自白しました。然し私の顔を見たときに、その激した心の調子が次第に収まつたと云

ふのです。私が肯はうと肯ふまいと、それには頓着する必要がない、たゞ其時の私から好い影響を受けて、一時的にせよ苦しい不安を免かれたのだと、兄さんは斷言するのです。

其時の私は前云つた通りです。たゞ煙草を吹かして黙つてゐた丈です。私は其時凡ての事を忘れてました。獨り兄さんを何うにかして此不安の裡から救つて上げたいと念じました。けれども私の心が兄さんに通じようとは思ひませんでした。又通じさせようといふ氣は無論ありませんでした。だから何にも云はずに黙つて煙草を吹かしてゐたのです。然し其處に純粹な誠があつたのかも知れません。兄さんは其誠を私の顔に讀んだのでせうか。

私は兄さんと砂濱の上をのそり／＼と歩きました。歩きながら考へました。兄さんは早晚宗教の門を潜つて始めて落付ける人間ではなからうか。もつと強い言葉で同じ意味を繰り返すと、兄さんは宗教家になる爲に、今は苦痛を受けつゝあるのではなからうか。

三十四

「君近頃神といふものに就て考へた事はないか」

私は仕舞に斯ういふ質問を兄さんに掛けました。私が此處でとくに「近頃」と斷つたのは、書生時代の古い回想から來たものであります。其時分は二人共まだ考への纏まらない青二才でしたが、それでも私は思索に耽り勝な兄さんと、よく神の存在に就いて云々したものであります。序だから申しますが、兄さんの頭は其時分から少し外の人とは變つてゐました。兄さんは浮々と散歩をしてゐて、ふと自分が今歩いてゐたなといふ事實に氣が付くと、さあ夫が解すべからざる問題になつて、考へずには居られなくなるのでした。歩かうと思へば歩くのが自分に違ないが、其歩かうと思ふ心と、歩く力とは、果して何處から不意に湧いて出るか、それが兄さんには大いなる疑問になるのでした。

二人はそんな事から神とか第一原因とかいふ言葉をよく使ひました。今から考へると解らずに使つたのでした。然し口の先で使ひ慣れた結果、仕舞には神も何時か陳腐になりました。それから二人とも申し合せた様に黙りました。黙つてから何年目になるでせう。私は静かな夏の朝の、海といふ深い色を沈める大きな器の前に立つて、兄さんと相對しつゝ、再び神といふ言葉を口にしたのであります。

然し兄さんは其言葉を全く忘れてゐました。思ひ出す氣色さへありませんでした。私の質問に對する返事としては、たゞ微かな苦笑があつた。皮肉な唇の端を横切つた丈でした。

私は兄さんの此態度で辟易する程に臆病ではありませんでした。また思ふ事を云ひ終せず引込む程疎い間柄でもありませんでした。私は一步前へ進みました。

「何處の馬の骨だか分らない人間の顔を見てさへ、時々難有いといふ氣が起るなら、圓滿な神の姿を束の間も離れずに拜んでゐられる場合には、何百倍幸福になるか知れないぢやないか」

「そんな意味のない口先丈の論理が何の役に立つものかね。そんなら神を僕の前に連れて來て見せて呉れるが好い」

兄さんの調子にも兄さんの眉間にも自烈たさうなものが顫動してゐました。兄さんは突然足下にある小石を取つて二三間波打際の方に馳け出しました。さうして夫を遙の海の中へ投げ込みました。海は靜かに其小石を受け取りました。兄さんは手應のない努力に、憤りを起す人のやうに、二度も三度も同じ所作を繰返しました。兄さんは磯へ打ち上げられた昆布だか若布だか、名も知れない海藻の間を構はず駆け廻りました。それから又私の立て見てゐる所へ歸つて來ました。

「僕は死んだ神より生きた人間の方が好きだ」

兄さんは斯う云ふのです。さうして苦しさに呼吸をはずませておりました。私は兄さんを連れて、又そろ／＼宿の方へ引き返しました。

「車夫でも、立ん坊でも、泥棒でも、僕が難有いと思ふ刹那の顔、即ち神ぢやないか。山でも川でも海でも、僕が崇高だと感ずる瞬間の自然、取りも直さず神ぢやないか。其外に何んな神がある」

兄さんから斯う論じかけられた私は、たゞ「成程」と答へる丈でした。兄さんは其時は物足りない顔をします。然し後になると矢張り私に感心した様な素振を見せます。實を云ふと、私の方が兄さんに遣り込められて感心する丈なのですが。

三十五

我々は沼津で二日程暮しました。序に興津迄行かうかと相談した時、兄さんは厭だと云ひました。旅程に掛けては、萬事私の思ひの儘になつてゐる兄さんが、何故其時に限つて断然私の

申し出を拒絶したのか、私には頓と解りませんでした。後で其説明を聞いたら、三保の松原だの天女の羽衣だのが出て来る所は嫌ひだと云ふのです。兄さんは妙な頭を有つた人に違ありません。

我々はつひに三島迄引き返しました。其處で大仁行の汽車に乗り換へて、とう／＼修善寺へ行きました。兄さんには始めから此温泉が大變氣に入つてゐたやうです。然し肝心の目的地へ着くや否や、兄さんは「おや／＼」といふ失望の聲を放ちました。實際兄さんの好いてゐたのは、修善寺といふ名前で、修善寺といふ所ではなかつたのです。瑣事ですが、是も幾分か兄さんの特色になりますから序に附加へて置きます。

御承知の通り此温泉場は、山と山が抱合つてゐる隙間から谷底へ陥落したやうな低い町にあります。一旦其所へ這入つた者は、何方を見ても青い壁で鼻が支へるので、仕方なしに上を見上げればなりません。俯向いて歩いたら、地面の色さへ碌に眼には留まらない位狭苦しいのです。

今迄海よりも山の方が好いと云つてゐた兄さんは、修善寺へ来て山に取り圍まれるが早い、急に窮屈がり出しました。私はすぐ兄さんを伴れて、表へ出て見ました。すると、普通の町なら先

往來に當る所が、一面の川床で、青い水が岩に打つかりながら其中を流れてゐるのです。だから歩くと云つても、歩きたい丈歩く餘地は無論ありませんでした。私は川の眞中の岩の間から出る温泉に兄さんを誘ひ込みました。男も女もごちゃ／＼に一つ所に浸つてゐるのが面白かつたからです。不潔な事も話の種になる位でした。兄さんと私はさすがに其所へ浴衣を投げ棄て、這入る勇氣はありませんでした。然し湯の中にある黒い人間を、岩の上に立つて物好らしく何時迄も眺めてゐました。兄さんは嬉しさうでした。岩から岸に渡した危ない板を踏みながら元の路へ引き返す時に、兄さんは「善男善女」といふ言葉を使ひました。それが雑談半分の形容詞でなく、全くさう思はれたらしいのです。

翌朝楊枝を銜へながら、一所に内風呂に浸つた時、兄さんは「昨夕も寐られないで困つた」と云ひました。私は今の兄さんにと取つて寐られないが一番毒だと考へてゐましたので、つい夫を問題にしました。

「寐られないと、何かして寐よう／＼と焦るだらう」と私が聞きました。

「全くさうだ、だから猶寐られなくなる」と兄さんが答へました。

「君、寐なければ誰かに濟まない事でもあるのか」と私が又聞きました。

兄さんは變な顔をしました。石で疊んだ風呂槽の縁に腰を掛けて、自分の手や腹を眺めてゐました。兄さんは御存じの通り餘り肥つては居ません。

「僕も時々寐られない事があるが、寐られないのも亦愉快なものだ」と私が云ひました。

「何うして」と今度は兄さんが聞きました。私は其時私の覺えてゐた燈影無睡を照し心清妙香を聞くといふ古人の句を兄さんの爲に擧げました。すると兄さんは忽ち私の顔を見てにや／＼と笑ひました。

「君のやうな男にさういふ趣が解るかね」と云て、不審さうな様子をしました。

三十六

その日私はまた兄さんを引張り出して今度は山へ行きました。上を見て山に行き、下を向いて湯に入る、それより外にする事は先づない所なのですから。

兄さんは瘦せた足を鞭のやうに使つて細い道を達者に歩きます。其代り疲れる事も亦人一倍早

いやうです。肥つた私わたしがのそく後あとから上あつて行くと、木の根ねに腰こしを掛かけて、せえく云いつてゐます。兄にいさんのは他ひとを待まち合あはせるのではありません。自分じぶんが呼い息きを切きらして已やむを得えずに斃たぶれるのです。

兄にいさんは時々ときとき立ち留とどまつて茂しげみの中なかに咲さいてゐる百ひゃく合ごうを眺ながめました。一度いちどなどは白しろい花はな片びらをとくに指ゆびさして、「あれは僕ぼくの所しよ有うだ」と斷ことわりました。私わたしにはそれが何なんの意味いみだか解わかりませんでした。兄にいさんは又また足あしの下したに見みえる森もりだの谷たにだのを指さして、「あれ等らも悉ことごとく僕ぼくの所しよ有うだ」と云いひました。二度にど迄まで繰かり返かへされた此この言こと葉はで、私わたしは始はめて不ふ審しんを起おこしました。然しかし其その不ふ審しんは其その場ばですぐ晴はらす譯わけに行ゆきませんでした。私わたしの質しつ問もんに對たいする兄にいさんの答こたへは、たゞ淋さびしい笑わらひに過すぎなかつたのです。

我われ々は其その茶ちや店てんの床とこ几ぎの上うへで、しばらく死しんだやうに寐ねてゐました。其その間ま兄にいさんは何なにを考かんへてゐたか知しりません。私わたしはたゞ明あきらかな空そらを流ながれる白しろい雲くもの樣やう子すばかり見みてゐました。私わたしの眼めはきら／＼しました。次第しだいに歸かへり途みちの暑あつさが想おもひやられるやうになりました。私わたしは兄にいさんを促うながして又また山やまを下おりました。其その時ときです。兄にいさんが突とつ然ぜん後ごから私わたしの肩かたをつかんで、「君きみの心こころと僕ぼくの心こころとは一體いつたい何なん處どこを

迄まで通とおじてゐて、何どこ處ところから離はなれてゐるのだらう」と聞きいたのは、私わたしは立たち留とどまると同どう時じに、左ひだりの肩かたを二三にさん度ど強つよく小こ突つき廻まされました。私わたしは身み體たいに感かんずる動どう搖よろを、同おなじやうに心こころでも感かんじました。私わたしは平生へいぜいから兄にいさんを思し索さく家かと考かんへてゐました。一いつ所しよに旅たびに出でてからは、宗しゆ教けうに這はい入いらうと思おもつて這はい入い口くちが分わからないで困こまつてゐる人ひとのやうにも解かい釋しやくして見みました。私わたしが心こころに動どう搖よろを感かんじたといふのは、果はたして兄にいさんの此この質しつ問もんが、さういふ立た場ばから出でたのであらうかと迷まよつたからです。私わたしはあまり物ものに頓とん着ちやくしない性せい質しつです。またあまり物ものに驚おどろかない、至いたつて鈍どんな男をとこです。けれども出し立だつ前ぜんあなから色いろ々く依い頼らいを受うけたため、兄にいさんに對たいして丈だけは、妙めうに銳えい敏びんになりたがつてゐました。私わたしは少すこし平へい氣きの道みちを踏ふみ外はずしさうになりました。

「Keine Brücke führt von Mensch zu Mensch. (人ひとから人ひとへ掛かけ渡わたす橋はしはない)」

私わたしはつゝ覺おぼえてゐた獨ど逸いつの諺ことわざを返へん事に使つかひました。無む論ろん半はん分ぶんは問もん題だいを面めん倒たうにしない故こ意いの作さ略りやくも交まじてゐたでせうが。すると兄にいさんは、「さうだらう、今いまの君きみはさうより外ほかに答こたへられまい」と云いふのです。私わたしはすぐ「何なに故ご」と云いつて聞き返かへしました。

「自じ分ぶんに誠せい實じつでないものは、決けつして他た人にんに誠せい實じつであり得えない」

私は兄さんの此言葉を、自分の何處へ應用して好いか氣が付きませんでした。

「君は僕のお守になつて、わざ／＼一所に旅行してゐるんぢやないか。僕は君の好意を感謝する。けれども左右いふ動機から出る君の言動は、誠を装ふ偽りに過ぎないと思ふ。朋友としての僕は君から離れる丈だ」

兄さんは斯う斷言しました。さうして私を其處へ取残した儘、一人でどん／＼山道を馳け下りて行きました。其時私も兄さんの口を迸しる Einsamkeit, du meine Heimat Einsamkeit! (孤獨なるものよ、汝はわが住居なり) といふ獨逸語を聞きました。

三十七

私は心配しい／＼宿へ歸りました。兄さんは室の眞ん中に蒼い顔をして寐ておりました。私の方を見ても口を利きません、動きもしません。私は自然を尊む人を、自然の儘にして置く方針を取りました。私は靜かに兄さんの枕元で一服しました。それから氣持の悪い汗を流すために手拭を持つて風呂場へ行きました。私が湯槽の縁に立つて身體を清めてゐると、兄さんが後から遣つて

來ました。二人は其時始めて物を云ひ合ひました。私は「疲れたらう」と聞きました。兄さんは「疲れた」と答へました。

午の膳に向ふ頃から兄さんの機嫌は段々回復して來ました。私はつひに兄さんに向つて、先刻山途で二人の間に起つた芝居が、りの動作に云ひ及びました。兄さんは始めのうち苦笑してゐました。然し仕舞には居住居を直して眞面目になりました。さうして實際孤獨の感に堪へないのだと云ひ張りました。私は其時始めて兄さんの口から、彼がたゞに社會に立つてのみならず、家庭にあつても一様に孤獨であるといふ痛ましい自白を聞かされました。兄さんは親しい私に對して疑念を持つてゐる以上に、其家庭の誰彼を疑つてゐる様でした。兄さんの眼には御父さんも御母さんも偽の器なのです。細君は殊にさう見えるらしいのです。兄さんは其細君の頭に此間手を加へたと云ひました。

「一度打つても落付いてゐる。二度打つても落付いてゐる。三度目には抵抗するだらうと思つたが、矢つ張り逆らはない。僕が打てば打つほど向はレデーらしくなる。そのために僕は益無頼漢扱ひにされなくては濟まなくなる。僕は自分の人格の墮落を證明するために、怒を小羊の

人行

上に洩らすと同じ事だ。夫の怒を利用して、自分の優越に誇らうとする相手は残酷ぢやないか。君、女は腕力に訴へる男より遙に残酷なものだよ。僕は何故女が僕に打たれた時、起つて抵抗して呉れなかつたと思ふ。抵抗しないでも好いから、何故一言でも云ひ争つて呉れなかつたと思ふ。斯ういふ兄さんの顔は苦痛に充ちてゐました。不思議な事に兄さんはこれ程鮮明に自分が細君に對する不快な動作を話して置きながら、その動作を敢てするに至つた原因に就いては、具體的に殆んど何事も語らないのです。兄さんはたゞ自分の周囲が偽で成立してゐると云ひます。しかも其偽を私の眼の前で組み立て、見せようとはしません。私は何でこの空漠な響を有つ偽といふ字のために、兄さんがそれ程興奮するかを不審がりました。兄さんは私が偽といふ言葉を字引で知つてゐる丈だから、そんな迂濶な不審を起すのだと云つて、實際に遠い私を窘なめました。兄さんから見れば、私は實際に遠い人間なのです。私は強ひて兄さんから偽の内容を聞かうともしませんでした。従つて兄さんの家庭には何んな面倒な事情が纏れ合つてゐるか、私には頓と解りません。好んで聞くべき筋でもなし、又聞いて置かないでも、家庭の一員たる貴方には報道の必要のない事と思ひましたから、其儘にして済ましました。たゞ御参考迄に一言注意して置きます。

すが、兄さんは其時御両親や奥さんに就いて、抽象的ながら云々されたに拘はらず、貴方に關しては、二郎といふ名前さへ口にされませんでした。それからお重さんとかいふ妹さんの事に就ても何にも云はれませんでした。

三十八

私が見さんにマラルメの話をしたのは修善寺を立つて小田原へ来た晩の事です。専門の違ふ貴方だから、或は失禮にもなるまいと思つて書き添へますが、マラルメと云ふのは有名な佛蘭西の詩人の名前です。斯ういふ私も實はその名前だけしか知らないのです。だから話と云つた所で作物の批評などではありません。東京を立つ前に、取りつけの外國雜誌の封を切つて、一寸眼を通したら、其うちにこの詩人の逸話があつたのを、面白いと思つて覚えてゐたので、私はついそれを擧げて、兄さんの反省を促して見たくなつたのです。

此マラルメと云ふ人にも多くの若い崇拜者がありました。其人達はよく彼の家に集まつて、彼の談話に耳を傾ける宵を更したのですが、如何に多くの人が押し懸けても、彼の坐るべき場所は

必ず暖爐の傍で、彼の腰を卸すのは必ず一箇の揺椅と極つてゐました。是は長い習慣で定められた規則のやうに、誰も犯すものがなかつたといふ事です。所がある晩新しい客が來ました。儘か英吉利のシモンズだつたといふ話ですが、その客は今日迄の習慣を丸で知らないで、何の席も何の椅子も同じ價と心得たのでせう、當然マラルメの坐るべきかの特別の椅子へ腰を掛けて仕舞ひました。マラルメは不安になりました。何時ものやうに話に實が入りませんでした。一座は白けました。

「何といふ窮屈な事だらう」

私はマラルメの話をした後で、斯ういふ一句の斷案を下しました。さうして兄さんに向つて、「君の窮屈な程度はマラルメよりも烈しい」と云ひました。

兄さんは鋭敏な人です。美的にも倫理的にも、智的にも鋭敏過ぎて、つまり自分を苦しめて生れて來たやうな結果に陥つてゐます。兄さんには甲でも乙でも構はないといふ鈍な所がありません。必ず甲か乙かの何方かなくては承知出來ないのです。しかも其甲なら甲の形なり程度なり色合なりが、びたりと兄さんの思ふ坪に嵌らなければ背がはないのです。兄さんは自分が鋭敏な

丈に、自分の斯うと思つた針金の様に際どい線の上を渡つて生活の歩を進めて行きます。其代り相手も同じ際どい針金の上を、踏み外さずに進んで來て呉れなければ我慢しないのです。然し是が見さんの我儘から來ると思ふと間違ひです。兄さんの豫期通りに兄さんに向つて働き懸ける世の中を想像して見ると、それは今の世の中より遙に進んだものでなければなりません。従つて兄さんは美的にも智的にも乃至倫理的にも自分程進んでゐない世の中を忌むのです。だから唯の我儘とは違ふでせう。椅子を失つて不安になつたマラルメの窮屈ではありません。

然し苦しいのは或はそれ以上かも知れません。私は何うかして其苦みから兄さんを救ひ出したいと念じてゐるのです。兄さんも自分で其苦しみに堪へ切れないで、水に溺れかゝつた人のやうに、只管藻掻いてゐるのです。私には心のなかの其争ひが能く見えます。然し天賦の能力と教養の工夫とで漸く鋭くなつた兄さんの眼を、たゞ落付を與へる目的のために、再び味くしなければならぬといふ事が、人生の上に於て何んな意義になるでせうか。よし意義があるにした所で、人間として出來得る仕事でせうか。

私は能く知つてゐました。考へて／＼考へ抜いた兄さんの頭には、血と涙で書かれた宗教の二

字が、最後の手段として、躍り叫んでゐる事を知つてゐました。

三十九

「死ぬか、氣が違ふか、夫でなければ宗教に入るか。僕の前途には此三つのものしかない」
兄さんは果して斯う云ひ出しました。其時兄さんの顔は、寧ろ絶望の谷に赴く人の様に見えるました。

「然し宗教には何うも這入れさうもない。死ぬのも未練に食ひ留められさうだ。なればまあ氣違だ。然し未來の僕は備置いて、現在の僕は君正氣なんだらうかな。もう既に何うかなつてゐるんぢやないかしら。僕は怖くて堪まらない」

兄さんは立つて縁側へ出ました。其處から見える海を手摺に倚つてしばらく眺めてゐました。夫から室の前を二三度行つたり來たりした後、又元の所へ歸つて來ました。

「椅子位失つて心の平和を亂されるマラルメは幸ひなものだ。僕はもう大抵なものを失つてゐる。纔に自己の所有として残つてゐる此肉體さへ、(此手や足さへ)遠慮なく僕を裏切る位だから」

兄さんの此言葉は、好い加減な形容ではないのです。昔から内省の力に勝つてゐた兄さんは、あまり考へた結果として、今は此力の威壓に苦しみ出してゐるのです。兄さんは自分の心が如何な状態にあらうとも、一應それを振り返つて吟味した上でないと、決して前へ進めなくなつてゐます。だから兄さんの命の流れは、刹那々にぼつ／＼中斷されるのです。食事中一分毎に電話口へ呼び出されるのと同じ事で、苦しいに違ありません。然し中斷するのも兄さんの心なら、中斷されるのも兄さんの心ですから、兄さんは詰まる所二つの心に支配されてゐて、其二つの心が嫁と姑の様に朝から晩迄責めたり、責められたりしてゐるために、寸時の安心も得られないのです。

私は兄さんの話を聞いて、始めて何も考へてゐない人の顔が一番氣高いと云つた兄さんの心を理解する事が出来ました。兄さんが此判断に到着したのは、全く考へた御蔭です。然し考へた御蔭で此境界には這入れないのです。兄さんは幸福になりたいと思つて、たゞ幸福の研究ばかりしたのです。所がいくら研究を積んでも、幸福は依然として對岸にあつたのです。

私はどう／＼兄さんの前に再び神といふ言葉を持ち出しました。さうして意外にも突然兄さん

から頭を打たれました。然し是は小田原で起つた最後の幕です。頭を打たれる前にまだ一節ありますから、先それから御報知しようと思ひます。然し前にも申した通り、貴方と私とは丸で専門が違ひますので、私の筆にする事が、時によると變に物識めいた餘計な云ひ草のやうに、貴方の眼に映るかも知れません。それで貴方に關係のない片假名杯を入れる時は、猶更躊躇しがちになります。是でも必要と認めない限り、成るべくそんな性質の文字は、省いてゐるのですから、貴方も其積で虚心に読んで下さい。少しでも貴方の心に輕薄といふ疑念が起る様では、折角書いて上げたものが、前後を通じて、何の役にも立たなくなる恐れがありますから。

私がまだ學校に居た時分、モハメツドに就いて傳へられた下のやうな物語を、何かの書物で讀んだ事があります。モハメツドは向ふに見える大きな山を、自分の足元へ呼び寄せて見せるといふのださうです。それを見たいものは何月何日を期して何處へ集まれといふのださうです。

四十

期日になつて幾多の群衆が彼の周圍を取巻いた時、モハメツドは約束通り大きな聲を出して、

向ふの山に此方へ來いと命令しました。所が山は少しも動き出しません。モハメツドは澄ましたもので、又同じ號令を掛けました。それでも山は依然として凝としてゐました。モハメツドはとう／＼三度號令を繰返さなければならなくなりました。然し三度云つても、動く氣色の見えない山を眺めた時、彼は群衆に向つて云ひました。――「約束通り自分は山を呼び寄せた。然し山の方では來たくないやうである。山が來て呉れない以上は、自分が行くより外に仕方があるまい」。彼はさう云つて、すた／＼山の方へ歩いて行つたさうです。

此話を讀んだ當時の私はまだ若う御座いました。私はいゝ滑稽の材料を得た積で、それを方々へ持つて廻りました。すると其内に一人の先輩がありました。みんなが笑ふのに、その先輩は「あゝ結構な話だ。宗教の本義は其處にある。それで盡してゐる」と云ひました。私は解らぬながらも、その言葉に耳を傾けました。私が小田原で兄さんに同じ話を繰返したのは、それから何年目になりますか、話は同じ話でも、もう滑稽の爲ではなかつたのです。

人行

「何故山の方へ歩いて行かない」

私が見事に斯う云つても、兄さんは黙つてゐます。私は兄さんに私の主意が徹しないのを恐

れて、附け足しました。

「君は山を呼び寄せる男だ。呼び寄せて来ないと怒る男だ。地團太を踏んで口惜しがる男だ。さうして山を悪く批判する事文を考へる男だ。何故山の方へ歩いて行かない」

「もし向ふが此方へ来るべき義務があつたら何うだ」と兄さんが云ひます。

「向ふに義務があらうとあるまいと、此方に必要があれば此方で行くだけの事だ」と私が答へます。

「義務のない所に必要のある筈がない」と兄さんが主張します。

「ぢや幸福の爲に行くさ。必要のために行きたくないなら」と私が又答へます。

兄さんは是で又黙りました。私のいふ意味はよく兄さんに解つてゐるのです。けれども是非、善悪、美醜の區別に於て、自分の今日迄に養ひ上げた高い標準を、生活の中心としなければ生きてゐられない兄さんは、さらりとそれを擲つて、幸福を求める氣になれないのです。寧ろそれに振ら下がりながら、幸福を得ようと焦燥ののです。さうして其矛盾も兄さんには能く呑み込めてゐるのです。

「自分を生活の心棒と思はないで、綺麗に投げ出したら、もつと楽になれるよ」と私が又兄さんに云ひました。

「ぢや何を心棒にして生きて行くんだ」と兄さんが聞きました。

「神さ」と私が答へました。

「神とは何だ」と兄さんが又聞きました。

私は此處で一寸自白しなければなりません。私と兄さんと斯う問答をしてゐる所を御讀みになる貴方には、私さも宗教家らしく映ずるかも知れませんが、——私が何うかして兄さんを信仰の道に引き入れようと力めてゐるやうに見えるかも知れませんが、實を云ふと、私は耶穌にもモハメツドにも縁のない、平凡な唯の人間に過ぎないのです。宗教といふものを夫程必要とも思はないで、漫然と育つた自然の野人なのです。話が兎角をちらへ向くのは、全く相手に兄さんといふ烈しい煩悶家を控へてゐる爲だつたのです。

私「兄さんに遣られた原因も全く其處にあつたのです。事實私は神といふものを知らない癖に、神といふ言葉を口にしました。兄さんから反問された時に、それは天とか命とかいふ意味と同じものだと漠然答へて置いたら、まだ可かつたかも知れませんが、所が前後の行きがより上、私にはそんな説明の餘裕がなくなりました。其時の問答はたしか下の様な順序で進行したかと思ひます。」

私「世の中の事が自分の思ふ様にばかりならない以上、そこに自分以外の意志が働いてゐるといふ事實を認めなくてはなるまい」

「認めてゐる」

私「さうして其意志は君のよりも遙に偉大ぢやないか」

「偉大かも知れない、僕が負けるんだから。けれども大概は僕のものよりも不善で不美で不眞だ。僕は彼等に負かされる譯がないのに負かされる。だから腹が立つのだ」

私「それは御互に弱い人間同志の競争を云ふんだらう。僕のはさうぢやない、もつと大きなものを指すのだ」

「そんな曖昧なものが何處にある」

私「なければ君を救ふ事が出来ない丈の話だ」

「ぢや暫くあると假定して……」

私「萬事其方へ委任して仕舞ふのさ。何分宜しく御頼み申しますつて。君、俥に乗つたら、落ことさないやうに車夫が引いて呉れるだらうと安心して、俥の上で寐る事は出来ないか」

「僕は車夫程信用出来る神を知らないのだ。君だつて左右だらう。君のいふ事は、全く僕の爲に拵へた説教で、君自身に實行する經典ぢやないのだらう」

私「左右ぢやない」

「ぢや君は全く我を投げ出してゐるね」

私「まあ左右だ」

「死なうが生きようが、神の方で好いやうに取計つて呉れると思つて安心してゐるね」

私「まあ左右だ」

私「兄さんから斯う詰寄せられた時、段々危しくなつて来るやうな氣がしました。けれども前

後の勢ひが自分を支配してゐる最中なので、また何うする譯にも行きません。すると兄さんが突
然手を擧げて、私の横面をびしやりと打ちました。

私は御承知の通り餘程神経の鈍く出来た性質です。御蔭で今日迄餘り人と争つた事もなく、又
人を怒らした試も知らずに過ぎました。私の鈍い所爲でもあつたでせうが、子供の時ですら親に
打たれた覚えはありません。成人しては無論の事です。生れて始めて手を顔に加へられた私は其
時われ知らずむつとしました。

「何をするんだ」

「それ見ろ」

私には此「それ見ろ」が解らなかつたのです。

「亂暴ぢやないか」と私が云ました。

「それ見ろ。少しも神に信頼してゐないぢやないか。矢張り怒るぢやないか。一寸した事で氣
分の平均を失ふぢやないか。落付が顛覆するぢやないか」

私は何とも答へませんでした。又何とも答へられませんでした。そのうちに兄さんはつと座を

立ちました。私の耳にはどん／＼階子段を馳け下りて行く兄さんの足音丈が残りました。

四十二

私は下女を呼んで伴の御客さんは何うしたと聞いて見ました。

「今しがた表へ御出になりました。大方濱でせう」

下女の返事が私の想像と一致したので、私はそれ以上の掛念を省いて、ごろりと其處に横にな
りました。すると衣桁の端に懸つてゐる兄さんの夏帽子がすぐ眼に着きました。兄さんは此暑い
のに帽子も被らずに何處かへ飛び出して行つたのです。あなたの様に、兄さんの一舉一動を心配
する人から見たら、仰向けに寐をべつた其時の私の姿は、少し吞氣過ぎたかも知れません。是は
固より私の鈍い神経の仕業に違ないのです。けれども唯鈍い丈で説明する以外に、もう少し御參
考になる點も交つてゐるやうですから、夫を一寸申上げます。

私は兄さんの頭を信じてゐました。私よりも鋭敏な兄さんの理解力に尊敬を拂つてゐました。

兄さんは時々普通の人に解らない様な事を出し抜けに云ひます。それが知らないものゝ耳や、教

育の乏しい男の耳には、何處かに破目の入つた鐘の音として、變に響くでせうけれども、能く兄さんを心得た私には、却て習慣的な言説よりは難有かつたのです。私は平生から其處に兄さんの特色を認めておりました。だから心配の必要はないと、あれ程強くあなたに斷言して憚らなかつたのです。それで一所に旅に出ました。旅へ出てからの兄さんは今迄私が叙述して來た通りですが、私は此旅行先の兄さんの爲に、少しづつ故の考へを訂正しなければならぬ様になつて來たのです。

私は兄さんの頭が、私より判然と整つてゐる事に就て、今でも少しの疑ひを挟さむ餘地はないと思ひます。然し人間としての今の兄さんは、故に較べると、何處か亂れてゐるやうです。さうして其亂れる原因を考へて見ると、判然と整つた彼の頭の働き其物から來てゐるのです。私から云へば、整つた頭には敬意を表したいし、又亂れた心には疑ひを置きたいのですが、兄さんから見れば、整つた頭、取も直さず亂れた心なのです。私はそれで迷ひます。頭は確である、然し氣はことによると少し變かも知れない。信用は出來る、然し信用は出來ない。斯う云つたら貴方はそれを満足な報道として受け取られるでせうか。それより外に云ひやうのない私は、自分自身で

既に困つて仕舞つたのです。

私は梯子段をどん／＼馳け下りて行つた兄さんを其儘にして、ごろりと横になりました。私は夫程安心してゐたのです。帽子も被らずに出て行つた位だから、すぐ歸るに極つてゐると考へたのです。然し兄さんは豫想通りさう手輕くは戻りませんでした。すると私もつひに大の字になつて居られなくなりました。私は仕舞に明らかな不安を抱いて立ち上りました。

濱へ出ると、日は何時か雲に隠れてゐました。薄どんよりと曇り掛けた空と、其下にある磯と海が、同じ灰色を浴びて、物憂く見える中を、妙に生温い風が磯臭く吹いて來ました。私は灰色を彩どる一點として、向ふの波打際に蹲踞んでゐる兄さんの姿を、白く認めました。私は黙つて其方角へ歩いて行きました。私は後から聲を掛けた時、兄さんはすぐ立ち上つて「先刻は失敬した」と云ひました。

兄さんは目的もなくまた留度もなく其處いらを歩いた揚句、仕舞に疲れたなりに疲れた場所に蹲踞んでしまつたのださうです。

「山に行かう。もう此處は厭になつた。山に行かう」

兄さんは今にも山へ行きたい風でした。

四十三

我々は其晩とう／＼山へ行く事になりました。山と云つても小田原からすぐ行かれる所は箱根の外にありません。私は此通俗な温泉場へ、最も通俗でない兄さん連れ込んだのです。兄さんは始めから、屹度騒々しいに違ないと云つておりました。それでも山だから二三日は我慢出来るだらうと云ふのです。

「我慢しに温泉場へ行くなんて勿體ない話だ」

是も其時兄さんの口から出た自嘲の言葉でした。果して兄さんは着いた晩からして、八釜しい隣室の客を我慢しなければならなくなりました。此客は東京のものか横濱のものか解りませんが、何でも言葉の使ひやうから判断すると、商人とか請負師とか仲買とかいふ部に屬する種類の人間らしく思はれました。時々不調和に大きな聲を出します。傍若無人に騒ぎます。さういふ事に餘り頓着のない私さへ随分辟易しました。御蔭で其晩は兄さんも私も些とも六づかしい話をしすに

寐て仕舞ました。つまり隣りの男が我々の思索を破壊するために騒いだ事に當るのです。

翌る朝私が見さんに向つて、「昨夜は寐られたか」と聞きますと、兄さんは首を掉つて、「寐られる所か。君は實に羨ましい」と答へました。私は何うしても寐つかれない兄さんの耳に、さかんな鼻聲を終宵聞かせたのださうです。

其日は夜明から小雨が降つておりました。それが十時頃になると本降に變りました。午少し過には、多少の暴模様さへ見えて來ました。すると兄さんは突然立ち上つて尻を端折ります。是から山の中を歩くのだと云ひます。凄まじい雨に打たれて、谷崖の容赦なく無暗に運動するのだと主張します。御苦勞千萬だとは思ひましたが、兄さんを思ひ留らせるよりも、私が見さんに賛成した方が、手数が省けますので、つい「宜からう」と云つて、私も尻を端折りました。

兄さんはすぐ呼吸の塞るやうな風に向つて突進しました。水の音だか、空の音だか、何とも蚊とも喩へられない響の中を、地面から跳ね上る護謨球のやうな勢ひで、ぼん／＼飛ぶのです。さうして血管の破裂する程大きな聲を出して、たゞわあつと叫びます。其勢ひは昨夜の隣室の客より何層倍猛烈だか分りません。聲だつて彼よりも遙に野獸らしいのです。しかも其原始的な叫び

は、口を出るや否や、すぐ風に攫つて行かれます。それを又雨が追ひ懸けて碎き盡します。兄さんは暫くして沈黙に歸りました。けれどもまだ歩き廻りました。呼吸が切れて仕方なくなる迄歩き廻りました。

我々が濡れ鼠のやうになつて宿へ歸つたのは、出てから一時間目でしたらうか、又二時間目に懸りましたらうか。私は臍の底まで冷えました。兄さんは唇の色を變へてゐました。湯に這入つて暖まつた時、兄さんはしきりに「痛快だ」と云ひました。自然に敵意がないから、いくら征服されても痛快なんでせう。私はたゞ「御苦勞な事だ」と云つて、風呂のなかで心持よく足を伸ばしました。

其晩は豫期に反して、隣の室がひつそりと靜まつてゐました。下女に聞いて見ると、兄さんを惱ました昨夕の客は、何時の間にかもう立つて仕舞つたのでした。私が見えなから思ひ掛けない宗教觀を聞かされたのは其宵の事です。私は一寸驚きました。

四十四

貴方も現代の青年だから宗教といふ古めかしい言葉に對してあまり同情は持つて居られないでせう。私も小六づかしい事は成るべく言はずに済ましたいのです。けれども兄さんを理解するためには、是非共其處へ觸れて來なければなりません。あなたには興味もなからうし、又意外でもあらうけれども、それを遠慮する以上、肝腎の兄さんが不可解になる丈だから、辛抱して此處のところを飛ばさずに讀んで下さい。辛抱さへなされば、貴方には能く解る事なんです。讀んでさうして善く兄さんを呑み込んだ上、御老人方の合點の行かれるやうに御宅へ紹介して上げて下さい。私は兄さんに就いて過度の心勞をされる御年寄に對して實際御氣の毒に思つてゐます。然し今の處貴方を通してより外に、ありの儘の兄さんを、兄さんの家庭に知らせる手段はないのだから、貴方も少し眞面目になつて、聞き慣れない字面に眼を御注ぎなさい。私は酔興で六づかしい事を書くのではありません。六づかしい事が活きた兄さんの一部分なのだから仕方がないのです。二つを引き離すと血や肉から出來た兄さんも亦存在しなくなるのです。

兄さんは神でも佛でも何でも自分以外に權威のあるものを建立するのが嫌ひなのです。(この建立といふ言葉も兄さんの使つた儘を、私が踏襲するのです)。それではニイチエのやうな自我

を主張するののかといふと左右でもないのです。

「神は自己だ」と兄さんが云ひます。兄さんが斯う強い斷案を下す調子を、知らない人が蔭で聞いてゐると、少し變だと思ふかも知れません。兄さんは變だと思はれても仕方のないやうな激した云ひ方をします。

「ぢや自分が絶対だと主張すると同じ事ぢやないか」と私が非難します。兄さんは動きません。「僕は絶対だ」と云ひます。

斯ういふ問答を重ねれば重ねる程、兄さんの調子は益變になつて來ます。調子ばかりではありません、云ふ事も次第に尋常を外れて來ます。相手が若し私のやうなものでなかつたならば、兄さんは最後迄行かないうちに、純粹な氣違として早く葬られ去つたに違ありません。然し私はさう容易く彼を見棄てる程に、兄さんを輕んじてはゐませんでした。私はとう／＼兄さんを底迄押し詰めました。

兄さんの絶対といふのは、哲學者の頭から割り出された空しい紙の上の數字ではなかつたのです。自分で其境地に入つて親しく經驗する事の出来る判切した心理的のものだつたのです。

兄さんは純粹に心の落ち付きを得た人は、求めないでも自然に此境地に入れるべきだと云ひます。一度此境界に入れば天地も萬有も、凡ての對象といふものが悉くなくなつて、唯自分丈が存在するのだと云ひます。さうして其時の自分は有とも無いとも片の付かないものだと云ひます。偉大なやうな又微細なやうなものだと云ひます。何とも名の付け様のないものだと云ひます。即ち絶対だと云ひます。さうして其絶対を經驗してゐる人が、俄然として半鐘の音を聞くとすると、其半鐘の音は即ち自分だといふのです。言葉を換へて同じ意味を表はすと、絶対即相對になるのだといふのです。従つて自分以外に物を置き他を作つて、苦しむ必要がなくなるし、又苦しめられる掛念も起らないのだと云ふのです。

「根本義は死んでも生きても同じ事にならなければ、何うしても安心は得られない。すべからく現代を超越すべし」といつた才人は兎に角、僕は是非共生死を超越しなければ駄目だと思ふ」兄さんは殆んど齒を喰ひしぼる勢で斯う言明しました。

私は此場合にも自分の頭が兄さんに及ばないといふ事を自白しなければなりません。私は人間として、果して兄さんのいふ様な境界に達せられべきものを未だ考へてゐなかつたのです。明瞭な順序で自然其處に歸着して行く兄さんの話を聞いた時、成程そんなものかと思ひました。又そんなものでも無からうかとも思ひました。何しろ私は兎角の是非を挟さむ文の資格を有つてゐない人間に過ぎませんでした。私は黙々として熱烈な言葉の前に坐りました。すると兄さんの態度が變りました。私の沈黙が鋭い兄さんの鋒先を鈍らせた例は、今迄にも何遍かありました。さうして夫が悉く偶然から來てゐるのです。尤も兄さんの様な聰明な人に、一種の思はくから黙つて見せるといふ技巧を弄したら、すぐ觀破されるに極つてゐますから、私の鈍いのも時には一得になつたのでせう。

「君、僕を單に口舌の人と輕蔑して呉れるな」と云つた兄さんは、急に私の前に手を突きました。私は挨拶に窮しました。

「君のやうな重厚な人間から見たら僕は如何にも輕薄な御喋舌に違ない。然し僕は是でも口で云ふ事を實行したがつてゐるんだ。實行しなければならぬと朝晩考へ續けに考へてゐるんだ。

實行しなければ生きてゐられないと迄思ひ詰めてゐるんだ」

私は依然として挨拶に困つた儘でした。

「君、僕の考へを間違つてゐると思ふか」と兄さんが聞きました。

「左右は思はない」と私が答へました。

「徹底してゐないと思ふか」と兄さんが又聞きました。

「根本的の様だ」と私が又答へました。

「然し何うしたら此研究的な僕が、實行的な僕に變化出来るだらう。どうぞ教へて呉れ」と兄

さんが頼むのです。

「僕にそんな力があるものか」と、思ひも寄らない私は斷るのです。

「いやある。君は實行的に生れた人だ。だから幸福なんだ。さう落付いてゐられるんだ」と兄

さんが繰り返すのです。

兄さんは眞劍のやうでした。私は其の時慚然として兄さんに向ひました。

「君の智慧は遙に僕に優つてゐる。僕には到底も君を救ふ事は出来ない。僕の力は僕より鈍い

ものになら、或は及ぼし得るかも知れない。然し僕より聰明な君には全く無効である。要するに君は瘠せて丈が長く生れた男で、僕は肥てすんぐり育つた人間なんだ。僕の眞似をして肥らうと思ふなら、君は君の脊丈を縮めるより外に途はないんだらう」

兄さんは眼からほろ／＼涙を出しました。

「僕は明かに絶對の境地を認めてゐる。然し僕の世界觀が明かになればなる程、絶對は僕と離れて仕舞ふ。要するに僕は圖を披いて地理を調査する人だつたのだ。それでゐて脚絆を着けて山河を跋涉する實地の人と、同じ經驗をしようと思つてゐるのだ。僕は迂濶なのだ。僕は矛盾なのだ。然し迂濶と知り矛盾と知りながら、依然として藻掻いてゐる。僕は馬鹿だ。人間としての君は遙に僕よりも偉大だ」

兄さんは又私の前に手を突きました。さうして恰も謝罪でもする時のやうに頭を下げました。涙がぼたり／＼と兄さんの眼から落ちました。私は恐縮しました。

四十六

箱根を出る時兄さんは「二度と斯んな所は御免だ」と云ひました。今迄通つて來たうちで、兄さんの氣に入つた所はまだ一ヶ所もありません。兄さんは誰と何處へ行つても直厭になる人なのでせう。夫も其筈です。兄さんには自分の身軀や自分の心からしてが既に氣に入つてゐないのですから。兄さんは自分の身軀や心が自分を裏切る曲者の様に云ひます。それが徒爾半分の出放題でない事は、今日迄一所に寐泊りの日數を重ねた私には能く理解出來ます。其私から有の儘の報知を受ける貴方にも篤と御合點が行く事だらうと思ひます。

斯ういふ兄さんと、私がよく一所に旅が出來ると御思ひになるかも知れません。私にも考へると、それが不思議な位です。兄さんを上に述べた様に頭の中へ疊み込んだが最後、如何に遲鈍な私だつて、御相手は出來悪い譯です。然し事實私は今兄さんと斯うして差向ひで暮してゐながら、左程に苦痛を感じてはゐないのです。少くとも傍で想像するよりは餘程樂なのだらうと考へてゐます。さうして夫を何故だと聞かれたら、一寸返答に差支るのです。貴方も同じ兄さんに就いて同じ經驗をなさりはしませんか。若し同じ經驗をなさらないならば、骨肉を分けた貴方よりも、他人の私の方が、兄さんに親しい性質を有つて生れて來たのでせう。親しいといふのは、

たゞ仲が好いと云ふ意味ではありません。和して納まるべき特性をどこか相互に分擔して前へ進めるといふ積なのです。

私は旅へ出てから絶えず兄さんの氣に障る様な事を云つたり爲たりしました。ある時は頭さへ打たれました。それでも私は貴方の家庭の凡ての人の前に立て、私はまだ兄さんから愛想を盡かされてゐないといふ事を明言出来ると思ひます。同時に、一種の弱點を持つた此兄さんを、私は今でも衷心から敬愛してゐると固く信じて疑はないのであります。

兄さんは私のやうな凡庸な者の前に、頭を下げて涙を流す程の正しい人です。それを敢てする程の勇氣をもつた人です。それを敢てするのが當然だと判断する丈の識見を具へた人です。兄さんの頭は明か過ぎて、やゝともすると自分を置き去りにして先へ行きたがります。心の他の道具が彼の理智と歩調を一つにして前へ進めない所に、兄さんの苦痛があるのです。人格から云へば其處に隙間があるのです。成功から云へば其處に破滅が潜んでゐるのです。此不調和を兄さんの爲に悲しみつゝある私は、凡ての原因をあまりに働き過ぎる彼の理智の罪に歸しながら、やつぱり、其理智に對する敬意を失ふ事が出来ないのです。兄さんを唯の氣六づかしい人、唯の我儘な

人とばかり解釋してゐては、何時迄経つても兄さんに近寄る機會は來ないかも知れません。従つて少しでも兄さんの苦痛を柔げる縁は、永劫に去つたものと見なければなりません。

我々は前申した通り箱根を立ちました。さうして直に此紅が谷の小別荘に入りました。私は其前一寸國府津に泊つて見る積で、暗に一人極のプログラムを立てゝゐたのですが、とうとう兄さんにはそれを云ひ出さずに仕舞つたのです。國府津でもまた「二度と斯んな所は御免だ」と怒られさうでしたから。其上兄さんは私から此別荘の話聞いて、しきりに其處へ落ち付きたがつてゐたのです。

四十七

何にでも刺戟され易い癖に、何んな刺戟にも堪へ切れないと云つた風の、今の兄さんには、草庵めいた此別荘が最も適してゐたのかも知れません。兄さんは物靜かな座敷から、谷一つ隔てゝ向ふの崖の高い松を見上げた時、「好いな」と云つて其處へ腰を卸しました。

「あの松も君の所有だ」

私は慰めるやうな句調で、わざと兄さんの口吻を真似て見せました。修善寺では頓と解らなかつた「あの百合は僕の所有だ」とか、「あの山も谷も僕の所有だ」とか云つた兄さんの言葉を想ひ出したからです。

別荘には留守番の爺さんが一人居ましたが、是は我々と出違に自分の宅へ歸りました。夫でも拭掃除のためや水を汲むために朝夕一度位づゝは必ず来て呉れます。男二人の事ですから、煮炊は無論出来ません。我々は爺さんに頼んで近所の宿屋から三度々々食事を運んで貰ふ事にしました。夜は電燈の設備がありますから、洋燈を点す手数は要らないのです。斯ういふ譯で、朝起きてから夜寐る迄に、我々の是非遣らなければならぬ事は、まあ床を延べて蚊帳を釣る位なものです。

「自炊よりも氣樂で閑靜だね」と兄さんが云ひます。實際今迄通つて来た山や海のうちで、此處が一番靜に違ないので。兄さんと差向ひで黙つてゐると、風の音さへ聞こえない事があります。多少八釜しいと思ふのは珊瑚樹の葉隠れにぎい／＼軋る隣の車井戸の響ですが、兄さんは案外それには無頓着です。兄さんは段々落付いて来るやうです。私はもつと早く兄さんを此處へ連

れて来れば好かつたと思ひました。

庭先に少しばかりの畠があつて、其處に茄子や唐もろこしが作つてあります。此茄子を挽いで食はうかと相談しましたが、漬物に拵へるのが面倒なので、つい已めにしました。唐もろこしは未だ食べられる程實が入りません。勝手口の井戸の傍に、トマトが植てあります。それを朝、顔を洗ふ序に、二人で食ひました。

兄さんは暑い日盛に、此庭だか畑だか分らない地面の上を下りて、凝と蹲踞んでゐる事があります。時々かななの花の香を嗅いで見たりします。かななに香なんかありやしません。凋んだ月見草の花片を見詰めてゐる事もあります。着いた日杯は左隣の長者の別荘の境に生えてゐる薄の傍へ行つて、長い間立つてゐました。私は座敷から其様子を眺めてゐましたが、何時迄経つても兄さんが動かないので、仕舞に縁先にある草履を突掛けて、わざ／＼傍へ行つて見ました。隣と我々の住居との仕切になつてゐる其處は、高さ一間位の土堤で、時節柄一面の薄が蔽ひ被さつてゐるのです。兄さんは近づいた私を顧みて、下の方にある薄の根を指さしました。

人行

薄の根には蟹が這つてゐました。小さな蟹でした。親指の爪位の大きさしかありません。それ

が一匹ではないのです。しばらく見てゐるうちに、一匹が二匹になり、二匹が三匹になるのです。仕舞には彼處にも此處にも蒼蠅い程眼に着き出します。

「薄の葉を渡る奴があるよ」

兄さんは斯んな觀察をして、まだ動かずに立つてゐます。私は兄さんを其處へ残して又故の席へ歸りました。

兄さんが斯ういふ些細な事に氣を取られて、殆んど我を忘れるのを見る私は、甚だ愉快です。是でこそ兄さんを旅行に連れ出した甲斐があると思ふ位です。其晩私は其意味を兄さんに話しました。

四十八

「先刻君は蟹を所有してゐたぢやないか」

私が兄さんに突然斯う云ひ掛けますと、兄さんは珍らしくあはゝと聲を立てて愉快さうに笑ひました。修善寺以後、私が時々所有といふ言葉を、妙な意味に使つて見せるので、單にそれを滑

稽と解釋してゐる兄さんには可笑しく響くのでせう。可笑しがられるのは、怒られるよりも餘つ程増しますが、事實私の方ではもつと眞面目なものでした。

「絶対に所有してゐたのだらう」と私はすぐ云ひ直しました。今度は兄さんも笑ひませんでした。然しまだ何とも答へません。口を開くのは矢張私の番でした。

「君は絶対々と云つて、此間六づかしい議論をしたが、何もさう面倒な無理をして、絶対になにかに這入る必要はないぢやないか。あゝいふ風に蟹に見惚れてさへおれば、少しも苦しくはあるまいがね。まづ絶対を意識して、それから其絶対が相對に變る刹那を捕へて、そこに二つの統一を見出すなんて、随分骨が折れるだらう。第一人間に出来る事か何だか夫さへ判然しやしない」兄さんはまだ私を遮らうとはしません。何時もよりは大分落付いてゐる様でした。私は一歩先へ進みました。

「それより逆に行つた方が便利ぢやないか」

「逆とは」

斯う聞き返す兄さんの眼には誠が輝いてゐました。

「つまり蟹に見惚れて、自分を忘れるのさ。自分と対象とがびたりと合へば、君の云ふ通りになるぢやないか」

「左右かな」

兄さんは心元なささうな返事をしました。

「さうかなつて、君は現に實行してゐるぢやないか」

「成程」

兄さんの此言葉はやはり茫然たるものでした。私は此時不圖自分が今迄餘計な事を云つてゐたのに氣が付きました。實を云ふと、私は絶對といふものを丸で知らないのです。考へもしなかつたのです。想像もした覺がないのです。たゞ教育の御蔭でさう云ふ言葉を使ふ事を知つてゐたのです。けれども私は人間として兄さんよりも落付いてゐました。落付いてゐるといふ事が兄さんより偉いといふ意味に聞こえては面目ない位なものですから、私は兄さんより普通一般に近い心の状態を有つてゐたと云ひ直しませう。朋友として私の兄さんに向つて働き掛ける仕事は、だから唯兄さんを私のやうな人並な立場に引き戻す丈なのです。然しそれを別な言葉で云つて見る

と非凡なものを平凡にするといふ馬鹿氣な意味にもなつて來ます。もし兄さんの方で苦痛の訴へがないならば、私のやうなものが、何で兄さんにこんな問答を仕懸ませう。兄さんは正直です。腑に落ちなければ何處迄も問ひ詰めて來ます。問ひ詰めて來られれば、私には解らなくなります。それ丈ならまだしもですが、斯ういふ批評的な談話を交換してゐると、折角實行的になりかけた兄さんを、又もとの研究的態度に戻して仕舞ふ恐れがあるのです。私は何より先にそれを氣遣ました。私は天下にありとあらゆる藝術品、高山大河、もしくは美人、何でも構はないから、兄さんの心を悉皆奪ひ盡して、少しの研究的態度も萌し得ない程なものを、兄さんに與へたいのです。さうして約一年ばかり、寸時の間斷なく、其全勢力の支配を受けさせたいのです。兄さんの所謂物を所有するといふ言葉は、必竟物に所有されるといふ意味ではありませんか。だから絶對に物から所有される事、即ち絶對に物を所有する事になるのだらうと思ひます。神を信じない兄さんは、其處に至つて始めて世の中に落付けるのでせう。

一昨日の晩は二人で濱を散歩しました。私たちの居る所から海邊迄は約三丁もあります。細い道を通つて、一旦街道へ出て、また夫を横切らなければ海の色は見えないのです。月の出にはまだ間がある時刻でした。波は存外暗く動いてゐました。眼がなれる迄は、水と磯との境目が判然分らないのです。兄さんは其中を容赦なくずん／＼歩いて行きます。私は時々生濇い水に足下を襲はれました。岸へ寄せる波の餘りが、のし餅の様に平らに擴がつて、思ひの外遠く迄押し上げて來るのです。私は後から兄さんに、「下駄が濡れやしないか」と聞きました。兄さんは命令でも下すやうに、「尻を端折れ」と云ひました。兄さんは先刻から足を汚す覺悟で、尻を端折つてゐたものと見えます。二三間離れた私にはそれが分らない位四圍が暗いのでした。けれども時節柄なんぞでせう、避暑地丈あつて人に會ひます。さうして會ふ人も會ふ人も、必ず男女二人連に限られてゐました。彼等は申し合せた様に、黙つて闇の中を辿つて來ます。だから忽然私たちの前へ現はれる迄は、丸で氣がつかないのです。彼等が摺り抜けるやうに私たちの傍を通つて行く時、眼を上げて物色すると、どれも是も若い男と若い女ばかりです。私は斯ういふ一對に何度か出合ひました。

私が見さんからお貞さんといふ人の話を聞いたのは其時の事でした。お貞さんは近頃大阪の方へ御嫁に行つたんださうですから、兄さんは其宵に出逢つた幾組かの若い男や女から、お貞さんの花嫁姿を連想でもしたのでせう。

兄さんはお貞さんを宅中で一番慾の寡ない善良な人間だと云ふのです。あゝ云ふのが幸福に生れて來た人間だと云つて羨ましがるので。自分もあゝなりたいたいと云ふのです。お貞さんを知らない私は、何とも評しやうがありませんから、只さうか／＼と答へて置きました。すると兄さんが「お貞さんは君を女にしたやうなものだ」と云つて砂の上へ立ち留りました。私も立ち留りました。

向ふの高い所に微かな燈火が一つ眼に入りました。晝間見ると、其見當に赤い色の建物や樹の間隙に眺められますから、此燈火も大方其赤い洋館の主が點けてゐるのでせう。濃い夜陰の色の中にたつた一つ懸け離れて星のやうに光つてゐるのです。私の顔は其燈火の方を向いてゐました。兄さんは又浪の來る海をまともに受けて立ちました。

其時二人の頭の上で、ピアノの音が不意に起りました。其處は砂濱から一間の高さに、石垣を

規則正しく積み上げた一構で、庭から濱へごかに通へるためせう、石垣の端には階段が筋違に庭先迄刻み上げてありました。私は其石段を上りました。

庭には家を洩れる電燈の光が、線のやうに落ちてゐました。其弱い光で照されてゐた地面は一體の芝生でした。花もあちこちに咲いてゐるやうでしたが、是は暗い上に廣い庭なので、判然とは分りませんでした。ピアノの音は正面に見える洋館の、明るく照された一室から出るやうでした。

「西洋人の別荘だね」

「左右だらう」

兄さんと私は石段の一番上の所に並んで腰を掛けました。聞こえない様な又聞こえるやうなピアノの音が、時々二人の耳を掠めに來ます。二人共無言でした。兄さんの吸ふ煙草の先が時々赤くなりしました。

五十

私はお貞さんのつゞきでも出る事と思つて、暗い中でそれとなく兄さんの聲を待ち受けてゐたのですが、兄さんは煙草に魅せられた人の様に、時々紙巻の先を赤くする丈で、中々口を開きません。それを石段の下へ投げて私の方へ向いた時は、もう話題がお貞さんを離れてゐました。私は少し意外に思ひました。兄さんの題目は、お貞さんに關係のない許か、ピアノの音にも、廣い芝生にも、美しい別荘にも、乃至は避暑にも旅行にも、凡て我々の周圍と現在とは全く交渉を絶つた昔の坊さんの事でした。

坊さんの名はたしか香嚴とか云ひました。俗にいふ一を問へば十を答へ、十を問へば百を答へるといつた風の、聰明靈利に生れ付いた人なのださうです。所が其聰明靈利が悟道の邪魔になつて、何時迄経つても道に入れなかつたと兄さんは語りました。悟を知らない私にも此意味は能く通じます。自分の智慧に苦しみ抜いてゐる兄さんには猶更痛切に解つてゐるでせう。兄さんは「全く多知多解が煩をなしたのだ」ととくに注意した位です。

數年の間百丈禪師とかいふ和尚さんに就いて參禪した此坊さんは遂に何の得る所もないやうに師に死なれて仕舞つたのです。それで今度は瀧山といふ人の許に行きました。瀧山は御前のや

うな意識想を振り舞はして得意がる男はとても駄目だと叱りつけたさうです。父も母も生れない先の姿になつて出て来いと言つたさうです。坊さんは寮舎に歸つて、平生讀み破つた書物上の知識を残らず點檢した揚句、あゝ／＼畫に描いた餅はやはり腹の足にならなかつたと嘆息したと云ひます。そこで今迄集めた書物をすつかり焼き棄てて仕舞つたのです。

「もう諦めた。是からはたゞ粥を啜つて生きて行かう」

斯う云つた彼は、それ以後禪のぜの字も考へなくなつたのです。善も投げ悪も投げ、父母の生れない先の姿も投げ、一切を放下し盡して仕舞つたのです。それからある閑寂な所を選んで小さな庵を建てる氣になりました。彼はそこにある草を交りました。そこにある株を掘り起しました。地ならしをするために、そこにある石を取つて除けました。すると其石の一つが竹藪に中つて憂然と鳴りました。彼は此朗かな響を聞いて、はつと悟つたさうです。さうして一撃に所知を亡ふと云つて喜んだといひます。

「何うかして香嚴になりたい」と兄さんが云ひます。兄さんの意味はあなたにも能く解るでせう。一切の重荷を卸して樂になりたいのです。兄さんは其重荷を預かつて貰ふ神を有てゐないの

です。だから掃溜か何かへ棄てて仕舞ひたいと云ふのです。兄さんは聰明な點に於てよく此香嚴といふ坊さんに似てゐます。だから猶のこと香嚴が羨ましいのでせう。

兄さんの話は西洋人の別荘や、ハイカラな樂器とは、全く縁の遠いものでした。何故兄さんが暗い石段の上で、磯の香を嗅ぎながら、突然こんな話をし出したか、それは私には解りません。兄さんの話が濟んだ頃はピアノの音ももう聞こえませんでした。潮に近いためか、夜露の所爲か、浴衣が濕つぽくなつてゐました。私は兄さんを促して又故の道へ引き返しました。往來へ出た時、私は行きつけの菓子屋へ寄つて饅頭を買ひました。それを食ひながら暗い中を黙つて宅迄歸つて來ました。留守を頼んで置いた爺さんの所の子供は、蚊に喰はれるのも構はずぐう／＼寐てゐました。私は饅頭の餘りを遣つて、すぐ子供を歸してやりました。

五十一

人行
昨日の朝食をした時、飯櫃を置いた位地の都合から、私が兄さんの茶碗を受けとつて、一膳目の御飯をよそつてやりますと、兄さんは又お貞さんの名を私の耳に訴へました。お貞さんがま

だ嫁に行かないうちは、丁度今私がしたやうに、始終兄さんのお給仕をしたものださうですね。昨夜は性格の點からお貞さんに比較され、今朝は又お給仕の具合で同じお貞さんにたとへられた私は、つい兄さんに向つて質問を掛けて見る氣になりました。

「君は其お貞さんとかいふ人と、斯うして一所に住んでゐたら幸福になれると思ふのか」

兄さんは黙つて箸を口へ持つて行きました。私は兄さんの態度から推して、大方返事をするのが厭なんだらうと考へたので、それぎり後を推しませんでした。すると兄さんの答が、御飯を二口三口嚙み下したあとで、不意に出て來ました。

「僕はお貞さんが幸福に生れた人だと云つた。けれども僕がお貞さんのために幸福になれるとは云やしない」

兄さんの言葉は如何にも論理的に終始を貫いて眞直に見えます。けれども暗い奥には矛盾が既に漂よつてゐます。兄さんは何にも拘泥してゐない自然の顔を見ると感謝したくなる程嬉しいと私に明言した事があるのです。それは自分が幸福に生れた以上、他を幸福にする事も出来ると思ふのと同じ意味ではありませんか。私は兄さんの顔を見てにや／＼と笑ひました。兄さんはさ

うなると只では濟まされない男です。すぐ食ひ付いて來ます。

「いや本當にさうなのだ。疑ぐられては困る。實際僕の云つた事は云つた事で、云はない事は云はない事なんだから」

私は兄さんに逆らひたくはありませんでした。けれども是程頭の明かな兄さんが、自分の平生から輕蔑してゐる言葉の上の論理を弄んで、平氣でゐるのは少し可笑しいと思ひました。それで私の腹にあつた兄さんの矛盾を遠慮なく話して聞かせました。

兄さんは又無言で飯を二口程頬張りました。兄さんの茶碗は其時空になりましたが、飯櫃は依然として兄さんの手の届かない私の傍にありました。私はもう一遍給仕をする考へで、兄さんの鼻の先へ手を出したのです。所が今度は兄さんが應じません。此方へ寄こして呉れと云ひます。私は飯櫃を向ふへ押して遣りました。兄さんは自分でしやも子を取つて、飯をてこ盛にもり上げました。それから其茶碗を膳の上に置いた儘、箸も執らずに私に問ひ掛けるのです。

「君は結婚前の女と、結婚後の女と同じ女だと思つてゐるのか」
斯うなると私にはおいそれと返事が出來なくなりませす。平生そんな事を考へて見ないからでも

ありませうが。今度は私の方が飯を二口三口立て續けに頬張つて、兄さんの説明を待ちました。
「嫁に行く前のお貞さんと、嫁に行つたあとのお貞さんとは丸で違つてゐる。今のお貞さんはもう夫の爲にスポイルされて仕舞つてゐる」

「一體何んな人の所へ嫁に行つたのかね」と私が途中で聞きました。

「何んな人の所へ行かうと、嫁に行けば、女は夫のために邪になるのだ。さういふ僕が既に僕の妻を何の位悪くしたか分らない。自分が悪くした妻から、幸福を求めるのは押が強過ぎるぢやないか。幸福は嫁に行つて天真を損はれた女からは要求出来るものぢやないよ」

兄さんはさういふや否や、茶碗を取り上げて、むしや／＼てこ盛の飯を平らげました。

五十二

私は旅行に出てから今日に至る迄の兄さんを、是で出来る丈委しく書いた積です。東京を立つたのはつい昨日のやうですが、指を折るともう十日あまりになります。私の音信を宛にして待つて居られる貴方や御年寄には、此十日が少し長過ぎたかも知れません。私もそれは察してゐます。

然し此手紙の冒頭に御断りしたやうな事情のために、此處へ来て落ち付く迄は、殆んど筆を執る餘裕がなかつたので、已を得ず遅れました。其代り過去十日間のうち、此手紙に洩れた兄さんは一日もありません。私は念を入れて其日其日の兄さんを悉く此一封のうちに書き込みました。それが私の申譯です。同時に私の誇りです。私は當初の豫期以上に、私の義務を果し得たといふ自信のもとに、此手紙を書き終るのですから。

私の費やした時間は、時計の針で仕事の分量を計算して見ない努力だから、數字としては申し上げられませんが、随分の骨折には違ありませんでした。私は生れて始めてこんな長い手紙を書きました。無論一氣には書けません、一日にも書けません。ひまの見付り次第机に向つて書き掛けたあとを書き續けて行つたのです。然し夫は何でもありません。もし私の見た兄さんと、私の理解した兄さんが此一封のうちに動いてゐるならば、私は今より數層倍の手数と労力を費やしても厭はない積です。

人行
私は私の親愛するあなたの兄さんのために、此手紙を書きます。それから同じく兄さんを親愛する貴方のために此手紙を書きます。最後には慈愛に充ちた御年寄、あなたと兄さんの御父さ

んや御母さんのためにも此手紙をかきます。私の見た兄さんは恐らく貴方方の見た兄さんと違つてゐるでせう。私の理解する兄さんも亦貴方方の理解する兄さんではありますまい。もし此手紙が此努力に價するならば、其價は全くそこにあると考へて下さい。違つた角度から、同じ人を見て別様の反射を受けた所にあると思つて御参考になさい。

あなた方は兄さんの將來に就いて、とくに明瞭な知識を得たいと御望みになるかも知れませんが、豫言者でない私は、未來に喙を挾さむ資格を持つて居りません。雲が空に薄暗く被さつた時、雨になる事もありますし、又雨にならずに濟む事もあります。たゞ雲が空にある間、日の目の拜まれないのは事實です。あなた方は兄さんが傍のものを不愉快にすると云つて、氣の毒な兄さんに多少非難の意味を持たせて居る様ですが、自分が幸福でないものに、他を幸福にする力がある筈がありません。雲で包まれてゐる太陽に、何故暖かい光を與へないかと逼るのは、逼る方が無理でせう。私は斯うして一所にゐる間、出来る丈兄さんの爲に此雲を拂はうとしてゐます。貴方方も兄さんから暖かな光を望む前に、まづ兄さんの頭を取り巻いてゐる雲を散らして上げたら可いでせう。もし夫が散らせないなら、家族のあなた方には悲しい事が出来るかも知れません。兄

さん自身にとつても悲しい結果になるでせう。斯ういふ私も悲しう御座います。

私は過去十日間の兄さんを、書きました。此の十日間の兄さんが、未來の十日間に何うなるか、問題で、その問題には誰も答へられないのです。よし次の十日間を私が受け合ふにした所で、次の一ヶ月、次の半年の兄さんを誰が受け合へませう。私はたゞ過去十日間の兄さんを忠實に書いた丈です。頭の鋭くない私が、讀み直すひまもなく唯書き流したものだから、そのうちには定めて矛盾があるでせう。頭の鋭い兄さんの言行にも氣の付かない所に矛盾があるかも知れません。けれども私は斷言します。兄さんは眞面目です。決して私を胡麻化さうとしては居ません。私も忠實です。貴方を欺く氣は毛頭ないのです。

私が此手紙を書き始めた時、兄さんはぐう／＼寐てゐました。此手紙を書き終る今も亦ぐう／＼寐てゐます。私は偶然兄さんの寐てゐる時に書き出して、偶然兄さんの寐てゐる時に書き終る私を妙に考へます。兄さんが此眠から永久覺めなかつたら嘸幸福だらうといふ氣が何處かです。同時にもし此眠から永久覺めなかつたら嘸悲しいだらうといふ氣も何處かです。

解

說

『行人』解説

明治四十五年四月二十九日『彼岸過迄』が朝日新聞に掲了になつたあと、引き続き漱石はその年（大正元年）の十二月六日から、同じ新聞に『行人』を載せ始めた。是は恐らく漱石がその前年再度の胃潰瘍に倒れ、到頭一回も小説（もつとも漱石は明治四十四年には、『手紙』と題する短篇小説だの、『思ひ出す事など』の續きだの、その他小品・評論の幾つかを書いてゐる上に、夏には大阪朝日の希望で明石・和歌山・堺・大阪と方方講演をしてあるいてゐる）を書かなかつた爲に、その埋め合せとして、社の方でも同じ年の内にもう一度小説を書く事を要求し、漱石の方でも自分の義務としてそれを引き受ける事にしたものだらうと思ふ。その『行人』は然し、漱石が三度び潰瘍で倒れた爲に、翌大正二年四月七日をもつて一時中絶するの已むなきに至り、その後、九月十六日から再び掲載され始め、十一月十五日に至つてやつと完結する運びになつた。かうして『行人』は完結までに、殆んど滿一ケ年を要した。

説解

漱石は大正二年三月二十七日中島六郎に宛てて、「……音楽學校卒業式の切符御親切に態々御送被下難有存候然るに天氣模様と氣分のあしきとそれや是やにて遂に出席を不得遺憾此事に存候……」と書いてゐる。此所に「氣分のあしき」とあるのは、恐らく漱石の、胃の工合の悪い所から來たものに相違ない。ただこの日までのうちに、漱石がまだ寝込んでゐなかつた事だけは、この手紙によつても確實である。然るに越えて六日の四月二日に漱石は、當時東京朝日の社會部長をしてゐた山本松之助に宛てて、「拜啓まだ原稿を書くに頭がふら／＼し。立つと足がふら／＼し。胸も時々痛みますが。今日ためしに一回かきました。是があとすつとつゞくとよう御座いますがあとが危険ですからあなたの方の都合の出来るまで少し溜めて置いて出す譯には参りませうか。まだ流動物で俊寛の如く存在致居候」と書いてゐる。即ち漱石は三月二十七日以後、胃痛に悩まされて、到頭寝込んでしまつてゐるのである。然も書きさせた小説の事が氣になるので、少し痛みが間遠になつた隙を窺つて、この日まだ「頭がふら／＼」するにも拘はらず、無理に原稿を一回分書いて見てゐるのである。——然し事實はこの胃痛は、言はば、次いで來るものの、ほんの前觸に過ぎなかつた。「是があとすつとつゞくとよう御座いますがあとが危険ですから」と言つた漱石の豫感は實現され、その「あとの危険」がすぐによつて來た。後に漱石は森成麟造に宛てて、「見事な血便が出ました丸で履墨の如く鮮なものでした」と報告（大正二年五月三十日）して

ゐるが、漱石は激烈な胃潰瘍に襲はれ、五月二十八日池邊三山追悼の會に出席する爲に、初めて外出するまで、二ヶ月近く病床を離れる事が出来なくなるのである。「歸つてから」を書き上げた上で『行人』を閉ぢる氣でゐたらしい漱石は、その『歸つてから』を書きさせたまま、一時『行人』の事など考へてはゐられない健康状態に置かれる。健康が回復し、氣分がそつちへ向くやうになつてから、漱石はその書きさせた残りの部分と、恐らくはまたその後新たに考へ足した部分とを一緒にして、新たな一篇を、書きさせられた『歸つてから』のあとに付け加へる。是が『塵勞』五十二回である事は、言ふまでもない。『塵勞』が加はつて『行人』は、百六十七回といふ、漱石にとつて空前の、大小説となつた。

漱石が『彼岸過迄』で、それぞれ獨立した短篇を幾つか書いて、全體として見ればそれらのものが互に脈絡して一つの纏まつたものになつてゐるといふやうな、新しい形式の長篇小説を書いて見ようとしたといふ事は、既に『彼岸過迄』の解説で説明した通りである。漱石は『行人』に於いても、同じやうな形式を踏襲する。勿論『彼岸過迄』では、諸短篇相互の關係が少しルーズで、例へば『風呂の後』だの『停留所』だの『報告』だのでは、作者がそれほど重要でもないものに徘徊し過ぎて、反つて重要なものへの讀者の注意を兎角散漫にする傾向がないでもなかつた。『行人』では、同じやうな形式が踏襲されてゐるとは言つても、然し作者は、『彼岸過迄』のやう

な意味では、決して徘徊してゐない。短篇の數から言つても、此所には、(後に『塵勞』が加はつたが)、『友達』・『兄』・『歸つてから』の三つがあるのみである。然もそのうちの『兄』と『歸つてから』とは、その主題とするものの中へ直ちに突き入る努力が試みられる。是は恐らく漱石が、『彼岸過迄』の成績を自分で反省した結果、特に意識してかういふ舉に出たものに違ひない。

もつとも『行人』では、初めの『友達』だけは、短篇として獨立したものを持つてゐるが、『兄』と『歸つてから』とは、それぞれ獨立してゐると言はれべく、あまりに密接した相互關係を持つてゐる。『歸つてから』と、後に書かれた『塵勞』との關係といへども、同様である。従つて『行人』は、初めから『彼岸過迄』の形式を踏襲しようとしたものではないといふ見方が、成り立たなくもないやうである。殊に漱石は、『行人』に次いで書いた『心』の豫告で、「今度は短篇をいくつか書いて見たいと思ひます、……」と言つてゐる。既に「今度は」とある以上は、前の『行人』ではさうでなかつたといふ事が、言外に含められてゐるものと考へられなければならぬ。——然し『彼岸過迄』の中の『須永の話』と『松本の話』との關係を考へ、且つ『行人』の中の『友達』と外の二つもしくは三つのもとの關係を考へて見るならば、『行人』も亦『彼岸過迄』と同じやうに、幾つかの短篇を集めた長篇小説として書き出されはしたが、主題の性質上、自然と現在あるものやうになつたのだと解釋するのが、一番自然な解釋でありさうに思はれる。

初めから「短篇をいくつか書いて見たいと思は」なければ、『友達』のやうな、『行人』の主題と直接の關係のないものを、漱石が書く筈がないのである。また假令『彼岸過迄』のやうに、初めからそれぞれ獨立した短篇の幾つかを繋げる長篇小説を書く氣でゐても、其所に取り扱はれる主題次第では、『須永の話』と『松本の話』とのやうに、相互に密接に關聯したのも書かなければならなくなるのである。漱石が『心』の豫告で「今度は」と言つたのは、寧ろ『行人』の出來上りを見て言つたもので、是から『行人』を書かうとする時分の意圖を問題にしたのでないと見るのが、正當であると思ふ。

その上『彼岸過迄』のやうに、短篇を幾つか繋げて行つた上で、それを一人の人間の經驗として纏めるといふ事は、ある人間なりある事件なりを、一つの立場からのみでなく、少くとも二つ以上の立場から眺め得る事の利益を持つてゐる。この事も既に『彼岸過迄』の解説で述べた所である。この利益ある方法は、『行人』に於いても利用される。例へば『友達』の中の中心事件である、氣狂のお嬢さんの話は、二郎によつては、單にロマンティックな、詩的な事件としてしか受けとられないが、一郎によつては、もつと現實的な、もつと深刻な事件として受けとられる。然もその一郎は、二郎の立場から眺められるのみならず、またHさんの立場からも眺められる。一郎の妻君のお直でも同様である。お直は、一郎の立場からのみ眺められるのではなく、また二郎の

立場からも眺められるのである。

然も『行人』全體を貫いて、観察者としての位置に立つてゐる二郎は、『行人』の主人公である一郎の、弟だといふ事になつてゐるのである。さうしてその二郎は、お直が一郎の所に片づいて来る以前から、少しお直と知り合つてゐたといふ、お直に對する特別な關係を持つてゐる。更に一郎とお直との間には、超える事の出来ない不和の溝が掘られ、世間一般とは違ふ、特殊な夫婦關係が結ばれてゐる。のみならずその二郎は、その一郎夫婦と一緒に、自分の父や母や妹や親類の娘と同じ屋根の下に住んでゐる。最後に一郎は、弟の誠實を信じてゐるにも拘はらず、お直を信じる事が出来ないために、お直が私かに二郎に心を寄せてゐるのではないかと、疑つてゐる。

——二郎が『行人』の中の諸人物と、さういふ複雑な關係に立つてゐる以上、二郎が『行人』の中で、『彼岸過迄』の敬太郎のやうな「絶えず受話器を耳にして」「世間」を聴く一種の探訪のやうな役割ではなく、もつと重要な役割を勤めなければならなかつた事は、言ふまでもない事である。二郎は、兄夫婦の關係に就いて、母親の意見も聞かされれば、お重の意見も聞かされる。お直自身の意見も聞かされれば、兄自身の意見も聞かされる。自分自身の意見も持つてゐれば、Hさんの意見も聴かうとする。のみならず二郎は、或は兄の嫉妬の的にもなり、或は兄から頼まれて嫂を和歌山まで連れ出しさへもする。

この事は作品『行人』と讀者との間隔を、『彼岸過迄』の場合よりも、遙に近親なものにする効能を持つてゐると思ふ。『行人』といふ人生のドラマを見る爲に、讀者が作者から指定された觀覽席は、二郎である。讀者は絶えず二郎の立場（勿論『塵勞』の大部分は、Hさんの立場から見た一郎の敘述である。然し是もHさんの口から、二郎を相手にして語られるのである）から『行人』の世界を眺める。従つて二郎が『行人』の世界と密接な關係に立ち、二郎が『行人』の世界の渦の中に捲き込まれる事が深くなればなるほど、讀者の『行人』の世界に對する關係は密接となり、『行人』の世界の渦の中に捲き込まれる事が段段深くなつて行くのである。然し『行人』の中の諸人物と二郎との關係が複雑であるといふ事の利益は、單にさういふ點にあるのみではなかつた。寧ろそれよりもつと大きい利益は、『行人』の世界に出て来る人間が、誰でも二郎に、思ふままの事を言つて、それぞれ自分の自然な赤裸裸な姿を、二郎を通して讀者に示すといふ點である。一郎もお直も、母親もお重も、すべて相手が二郎であるから、言ひたいままの事を言ふ。もしその間に何等かの嘘やお世辭や遠慮や體裁があるとすれば、それはその人の持つて生れた嘘やお世辭や遠慮や體裁であつて、誰が出て來ても到底取り拂ふ事の出来ないものであるのに外ならない。さういふものを勘定に入れないとすれば、『行人』の中の諸人物にとつて、二郎ほど物と言ひ可い人間はなかつたと言つて可いのである。かういふ「聽役」を設けた漱石が、此所で何を

書かうとしたかは、凡そ想像する事が出来るといふ氣がする。

もつとも漱石はこの『行人』を書くのに、初めのうちは、随分氣乗りがしなかつたやうである。『行人』が新聞に載り始める凡そ一月前、大正元年十一月九日漱石は皆川正禧に宛てて、「大病後どうしてもからだが大丈夫にならないやゝともするとやりそこなふ是では長生は無論かうやつて生きてゐてもまあ癡人のやうなものである。此夏は信州から野州の方を旅行した歸つてから愚圖々々してゐるうちに又小説を書かなければならない譯になつてもうそろ／＼書き出さなければならぬ。」と書いてゐるが、その月の二十五日になつてもまだ氣が向かなかつたと見えて、沼波武夫に宛てて、「私はもう小説をかゝなくてはならないので辟易して居ります」と書いて居り、十二月一日の中村翁宛の手紙にも、「拜啓毎々御手紙ありがたく候實は昨三十日夜漸く一回認め社へむけ發送致置候氣も乗らず自信もなく如何にも書きにく／＼候是が百回以上になるかと思ふと少々恐ろしく候小生の考では創作は天下の根氣仕事の一なるべくと存候／＼……返す／＼御心配のみかけ御氣の毒に候是と申すも小生の創作に對する興味やら考やら強ひて複雑なものを鮮やかにまとめんとする無駄骨折やさうして最後に來る面倒くさ／＼やらがかたまつたものと御勘辨願度候……／＼……今日もからは休み候様子もし小生の爲めとならば實以て恐縮大兄に對しても社に對しても無申譯次第小生は如何なるまづきものをかいて世間の物笑ひとなつても筆を執らねば

ならぬ義理合と相成候御心安く御擱筆道體御加養是祈候」と書いてゐる。そのみではない。もう相當（恐らく『兄』の第六か第七かあたりまで）書き込んで行つてゐた筈の、大正二年一月十日に於いてさへ、漱石は大谷繞石に宛てて、「『行人』御讀被下候由難有存候 先がどうなるやら作者にも相分らずたゞ運次第に候御憫笑可被下候」といふやうな、ひどく心細い手紙を書いてゐるのである。

勿論是は、漱石自身言つてゐるやうに、漱石の「創作に對する興味やら考やら強ひて複雑なものを鮮やかにまとめんとする無駄骨折やさうして最後に來る面倒くさ／＼やらがかたまつたもの」であつたには違ひない。然しそれとともに漱石の創作に對する興味を湧き立たせなかつたものは、當時絶えず漱石につき纏つて離れなかつた、孤獨感ではなかつたかと思はれる。漱石の孤獨感の一半が、「長生は無論かうやつて生きてゐてもまあ癡人のやうなものである」と感じなければならなかつた、漱石の健康状態から來てゐるものである事は、言ふまでもない。然しその一半は、もしくはその大半は、漱石が自分以外の人間との交渉から體驗した、心理的事實に基づいてゐるのである。

大正元年十月十二日、漱石が『行人』を書き出す凡そ二ヶ月前、漱石は阿部次郎に宛てて、「拜復葉書をありがたう「門」が出たときから今日迄誰も何もいつて呉れるものは一人もありません

でした。私は近頃孤獨といふ事に慣れて藝術上の同情を受けなくてもどうか斯うか暮らして行けるやうになりました。従つて自分の作物に對して賞賛の聲などは全く豫期して居ません。然し「門」の一部分が貴方に讀きかれてさうして貴方を動かしたといふ事を貴方の口から聞くと嬉しい満足が湧いて出ます。私は此満足に對して貴方に感謝しなければ義理が悪いと思ひます。私は私が喜んであなたのアツプリシエーションを受けた事を明言する爲に此手紙を書きます。／「彼岸過迄」はまだ二三部残つてゐます。もし讀んで下さるなら一部小包で送つて上げます。夫とも忙しくて夫所でなければ差控ます。虚に乗じて君の同情を貪るやうな我儘を起して今度の作物の上にも「門」同様の鑒賞を強ひる故意とらしき行爲を避けるためわざと伺ふのです。」と書いてゐる。同じ年の十二月四日、『行人』が新聞に載り出す二日前、漱石は津田青楓に宛てて、「此間あなたの知らない人が来てあなたと齋藤與里君とを並べてあれで氣が合ふだらうかと聞きましたから私は其人にとつても合ふまいと答へました。其終りに藝術家といふものは孤獨なものだと云つて聞かせました。藝術家が孤獨に安んぜられる程の度胸があつたら定めて愉快だらうと思ひますあなたにはさう思ひませんか。／私の小説を讀んで下さるのは難有いどうか愛想を盡かさずに讀んで下さい。私は孤獨に安んじたい。然し一人でも味方のある方がまだ愉快です。人間がまだ夫程純乎たる藝術〔家〕氣質になれないからでせう」と言つてゐる。同じ年の十二月二十六日沼波武夫宛

の手紙の中には、「大兄は自己を孤立と仰せられ候が孤立の意味はよく承知致居候小生もあなたに劣らぬ孤立ものに候」とある。大正二年三月二十二日戸川秋骨宛の手紙の中にも、「小説御讀み下さる丈にても難有き仕合せことに今回はことの外の御賞美にあづかり嬉しき限に候近來は自分の書いたものを朝新聞で讀んで自分で満足か不満足を感じる丈にて天下に味方は一人もなき心持に候へどもつゞまり相つかず不得已毎朝筆を運び居候次第御ほめにて恐縮致候」とある。漱石は當時、自分の健康を初めとして、自分の持つてゐたものは悉く失つてしまひ、「天下に味方は一人もなき」空冷な世界の中に坐つて、その寒さとその寂しさとを乗り越さう乗り越さうと努めながら、どうしてもそれを乗り越す事の出来ない、痛ましい状態にゐたのである。漱石が昔のやうな心勇みをもつて、創作に従事する事の出来る譯がない。

勿論漱石は、自分が自分を卑しくして、媚を他人に呈しさへすれば、忽にして自分の周囲は賑やかになる事を知つてゐた。然し「虚に乗じて君の同情を貪るやうな我儘を起して今度の作物の上にも「門」同様の鑒賞を強ひる故意とらしき行爲を避けるため」わざと『彼岸過迄』を送らずに、まづそれを讀むか讀まないかを訊いた上の事にしようとするほど、その方面では神経質に、他人に求める事をしまいとした漱石は、自分の威嚴の爲めにも、自分の見識の爲めにも、決して自分の身を落す事を肯んじなかつた。従つて漱石の孤高は、ますます孤高にならざるを得なかつ

た。然し是は單に漱石の、自分の作物への味方に對する態度のみではなかつたのである。漱石は自分の妻子に對しても、自分の朋友に對しても、亦自分の弟子たちに對しても——ひつくるめて漱石の、自分以外の世界に對する態度が亦、實にさうだつたのである。それだけに漱石の寂しさは、もし自分の矜持が許しさへするならば、叫びをあげたい位な、底ぬけの寂しさであつた。

——さういふ時期に書かれたものが、即ちこの『行人』なのである。漱石は『彼岸過迄』の中で、「内へとぐるを捲き込む性質」の須永の、千代子に對する不思議な戀愛を描いて、自分の中の厭な「執濃い油繪」のやうな性質の中へ解剖のメスを加へた。『行人』で漱石は、同じやうな性質を持つてゐる一郎の、お直に對する不思議な戀愛を描いて、再び自分の中の厭な「執濃い油繪」のやうな性質の中へ解剖のメスを加へようとする。それとともに漱石は此所で、なんでも言へる二郎の前に、もしくはなんでも言へるHさんの前に一郎を置いて、一郎の體驗を通して、自分の孤高の正しさと、並びに自分の孤高の寒さとの、叫び聲を上げるのである。『彼岸過迄』の問題は『行人』に來て、更に直接な形にひき直され、更に深みへ掘り下げられる。須永は大學を出た計りの青年である。一郎は大學の教授として、妻子のある、相當の年配の紳士である。さういふ主人公の外面的な條件だけから言つても、漱石の『行人』の主人公に對する關係は、ほゞ想像し得られる。

然し漱石が此所で自分自身の體驗を、いくら直接に取り扱はうとしたからと言つて、それが漱石自身をそのまま露骨に表現しようとしたものでない事は、言ふまでもない。その上漱石は、いくら自分自身の體驗を一郎の世界の中に盛り込むと言つて、例へばストリンダベリの『父』の場合のやうに、一つの立場だけに立つて自分の言ひたい事を言ひさへすれば、外の人物はどうなつても構はないといふほど、それほど得手勝手な、言はば暴君的な立場に立つ事を潔しとしない、作家であつた。『行人』に即して言へば、漱石は無論一郎の立場に立つてゐるには違ひないが、然し一郎の立場だけに立つて、一郎の言つたりしたりする事なら、どんな事でも正しいとするやうな、一郎に身最眞をする、婦女子の態度を決してとらなかつた。漱石は一郎の立場とともに、外の人の立場にも立つて、一郎を外から眺める。同じやうに漱石は一郎の立場に立つてお直を觀察するが、それとともに漱石は、二郎の立場に立つてもお直を觀察する。父や母やお重の立場に立つてもお直を觀察する。従つて漱石は、主として一郎の立場に立つて『行人』をかい行つてゐるのではあるが、言はば一郎を衆人環視の中に置いて、さうして一郎の立場に立つて書いてゐるのである。勿論その衆人の中には、いろんな理解の段階が存在する。岡田の段階よりも父母の段階の方が高いのかも知れないし、父母の段階よりもお直の段階の方が高いのかも知れない。またお直の段階よりも二郎の段階の方が高いに違ひないし、二郎の段階よりもHさんの段階の方が

高いに違ひない。さういふ理解の段階の多くの層の中を潜つて、『行人』の世界の中で、孤峭に聳え立つてゐるのがその長所と短所とを持つた、一郎の姿である。一方から言へば漱石は此所で、一郎が周囲の者から體驗させられる所のものと、周囲の者が一郎から體驗させられる所のものとを、一緒に公平に描き出して、どつちにでも同情しろと、人人の前に投げ出してゐるのだと言つても可いかも知れない。『行人』の第一回に手を著けた時、漱石は「強ひて複雑なものを鮮やかにまとめんとする無駄骨折」の爲にぐづぐづしてゐるのだと言つてゐたが、然しそれは決して「無駄骨折」ではなかつた。是ほど複雑なものを是ほど複雑なままに鮮やかに纏め得た、漱石の手際は、正に驚嘆に値ひする。殊に最後に付け加へられた『塵勞』の如きは、それによつて、『行人』のペースペクティヴがぐいと廣くなり、一郎のお直に對する疑惑が、ありふれた家庭悲劇の域を脱して、特殊のまままで普通の象徴となり、『行人』の問題が一般「人間」の問題にまで高められ、且つ深められ、従つて『行人』は『塵勞』によつて、更に驚くべく見事に、點睛されるのである。『行人』の一郎は、妻のお直を愛してゐる。然しお直は、一郎が要求してゐるやうには、一郎に愛を返さない。それが一郎を不安にする。——『行人』の主題は此所から發展する。一郎は或時はお直を、技巧の塊りのやうに考へる。また或時は不親切や殘酷心そのものの權化のやうに考へる。また或時はお直は自分を愚弄する爲に、自分の傍についてゐるのではないかと思ふ。また

或時は、是は結局お直が外に愛する男を持つてゐる爲ではないかとさへ思ふ。然しさう考へもしくはさう感じて見ても、一方ではそれとは丸で反對な、自然な、親切的な、忠實な、誠實なお直も亦、卒然として一郎の前にその姿を現はす事もなくはないのである。一郎はお直を、一圖に愛する譯にも行かない。また一圖にお直を憎む事も出来ないものである。二郎はお直を評して、「嫂は何處から何う押しでも押し様のない女であつた。此方が積極的に進むと丸で暖簾の様に抵抗がなかつた。仕方なしに此方が引き込むと、突然變な所へ強い力を見せた。其力の中には到底も寄り付けさうにない恐ろしいものもあつた。又は是なら相手に出来るから進まうかと思つて、まだ進みかねてゐる中に、弗と消えて仕舞ふのもあつた。自分は彼女と話してゐる間始終彼女から翻弄されつゝある様な心持がした。不思議な事に、其翻弄される心持が、自分に取て不愉快であるべき筈なのに、却て愉快でならなかつた。」と言つてゐるが、然しそれと同じ事を一郎が感じたとしても、一郎は二郎のやうに「始終彼女から翻弄されつゝある様な心持」を、「愉快でならな」と感じてゐる事は出来なかつた。さういふ戯れを享樂する爲には、一郎はあまりに眞面目であつた。またあまりに自己の優越を意識してゐた。最後にあまりに相手の魂を擱んで生きたがつてゐた。従つて二郎にとつて「愉快でならな」い事は、そのまま一郎にとつては、不「愉快でならな」い事であつた。それは結局相手を捕まへる、コンスタントな把手がないといふ事だからである。

一郎は、一郎自身の言葉を借りれば、「現在自分の眼前に居て、最も親しかるべき筈の人、其人の心を研究しなければ、居ても立つても居られないといふやうな必要」に迫られて、お直の正體を掴まうとしてゐるのである。然もそのお直が、お直の中に、コンスタントな把手を持つてゐなかつたとすれば、一郎はその正體を掴まうにも掴みやうはなく、結局一郎の頭は、空廻りをする蒸汽機關のやうに、仕舞ひには自ら火を發して、自分で自分を破壊するより仕方がないに違ひない。然し自分の妻君にコンスタントな把手がないといふ事、もしくは自分の妻君には、未成年者のやうに「性格」がないといふ事を認め、もしくは斷定するといふ事は、妻君を愛する、もしくは妻君を通して「女」を愛する一郎にとつて、到底堪へ得られる事ではなかつた。一郎にとつて、謂はれなく相手を輕蔑するといふ事は、やがて謂はれなく自分自身を輕蔑するといふ事である。従つて一郎は、誠實に相手を尊敬し、相手を自分と同じレベルに立つものとして、誠實に相手の言動から、その言動の奥に一貫してゐるものを捕捉しようとする。相手の言動に一貫するものがないならば、一郎はなほその奥に潜り入つて、其所にその一貫しないものを一貫させてゐる、何物かを突き留めようとする。然しいくら奥の方に潜り入つても、其所にはなんにもなかつた。是と言つて捕まへられる、しかとしたものが一つもなかつた。一郎は失望する。同時に一郎は憤怒する。さうして一郎は、「向ふでわざと考へさせるやうに仕向けて來るんだ。己の考へ慣れた頭を逆に利用して。何うしても馬鹿にさせて呉れないんだ」と、吐き出すやうに言ふ。さうして竟に「おれが靈も魂も所謂スピリットも攫まない女と結婚してゐる事丈は慥だ」といふやうな、悲しい認識に到達せざるを得なくなる。然も一郎はお直を、「靈も魂も所謂スピリットも」何も持つてない、ただ肉體だけを持つてゐる女であるといふ風に、マテリアリスティックに見縊つてしまふ事には、到底堪へる事が出來ないのである。

二郎は嫂の事を、「自分の見た彼女は決して温かい女ではなかつた。けれども相手から熱を與へると、温め得る女であつた。持つて生れた天然の愛嬌のない代りには、此方の手加減で随分愛嬌を搾り出す事の出來る女であつた。自分は腹の立つ程の冷淡さを嫁入後の彼女に見出した事が時々あつた。けれども嬌め難い不親切や残酷心はまさかにあるまいと信じてゐた。」と評した。一郎も恐らくはお直に就いて、同じやうな事を感じてゐたのだらうとも思ふ。然し第一に一郎には、相手を「温め得る」爲に、自分の方から「熱を與へる」事の出來ない天性であつた。その爲には一郎は、あまりに自分自身に熱をほしがすぎた。その上一郎は、相手から「愛嬌を搾り出す」爲に、自分で「手加減」をする事の出來ない人間であつた。「己は自分の子供を綾成す事が出來ないばかりぢやない。自分の父や母でさへ綾成す技巧を持つてゐない。それ所か肝心のわが妻さへ何うしたら綾成せるか未だに分別が付かないんだ。此年になる迄學問をした御蔭で、そんな技

巧は覺える餘暇がなかつた。二郎、ある技巧は、人生を幸福にする爲に、何うしても必要と見えるね」と、一郎は言つてゐる。「手加減」をすることは、もしくは「綾成す」とは、自分が相手と同じレベルの上に立つといふ事である。高い所に立つてゐる人から言へば、自分を低い所へ下ろすといふ事である。自分の調子を下ろすといふ事である。一郎はそれほど相手を輕蔑する事を欲しないとともに、自分を低くする事を欲しない。もし相手が自分よりも低い所に立つてゐるものならば、相手こそ自分の方へ近づいて來べきで、自分が相手の方へ近づくべきではないと考へてゐるのが、一郎である。Hさんの手紙の中には、「兄さんは鋭敏な人です。美的にも倫理的にも、智的にも鋭敏過ぎて、つまり自分を苦しめに生れて來たやうな結果に陥つてゐます。兄さんには甲でも乙でも構はないといふ鈍な所がありません。必ず甲か乙かの何方かなくては承知出來ないので。しかし其甲なら甲の形なり程度なり色合なりが、びたりと兄さんの思ふ坪に嵌らなければ肯がはないのです。兄さんは自分が鋭敏な丈に、自分の斯うと思つた針金の様に際どい線の上を渡つて生活の歩を進めて行きます。其代り相手も同じ際どい針金の上を、踏み外さずに進んで來て呉れなければ我慢しないのです。然し是が兄さんの我儘から來ると思ふと間違ひです。兄さんの豫期通りに兄さんに向つて働き懸ける世の中を想像して見ると、それは今の世の中より遙に進んだものでなければなりません。従つて兄さんは美的にも智的にも乃至倫理的にも自分程進

んでゐない世の中を思むのです。」と書いてある。さうしてHさんは、「天賦の能力と教養の工夫とで漸く鋭くなつた」一郎の眼を、「たゞ落付を興へる目的のために、再び味くしなければならぬ」といふ事に、果してどれだけの意味があるか、よし意義があるとしても、それが人間として出來る事であるかどうかと、疑つてゐる。まして當の一郎は無論、自分は自分があるがままの立場に立つてゐて、お直の方から自分の方へ近づいて來ること、當然であると思つてゐるのである。お直が自分の妻である以上、假令お直が現在低い所にゐるとしても、渾身の勇を奮つて、自分の高みへ近づかうとすること、妻たるべき道であると思つてゐるのである。

然しお直にとつて、一郎のこの世界とこの要求とは、到底理解出來ない種類のものであつた。お直はいつまでも、自分が持つて生れたままの考へ方と感じ方とをもつて、一郎に對してゐる。一郎の世界と一郎の要求とが理解出來ないお直には、従つて、自分の何所が何う氣に入らない爲に、いつも所天が自分に對してあんな不機嫌であるのか、到底了解する事が出來ない。お直は恐らく、一郎の機嫌の悪いのは、普通の意味で、自分が所天の氣に入らない——例へば相性が悪くて所天の氣に入らないのだとしか、考へてゐないに違ひないのである。だからお直は恐らく、自ら省みて疚しいと思ふ所は一つも持つてゐない。だから二郎から「兄さんに丈はもう少し氣を付けて親切にして上げて下さい」と言はれても、お直は、或は「妾そんなに兄さんに不親切に見え

て。是でも出来る丈の事は兄さんに爲て上てる積よ。……」といつたり、或は「……妾馬鹿で氣が付かないから、みんなから冷淡と思はれてゐるかも知れないけれど、是で全く出来る丈の事を兄さんに對してしてゐる氣なんですよ。——妾や本當に腑抜なのよ。ことに近頃は魂の抜殻になつちまつたんだから」といつたり、或は「妾のやうな魂の抜殻はさぞ兄さんにはお氣に入らないでせう。然し私は是で満足です。是で澤山です。兄さんについて今迄何の不足を誰にも云つた事はない積です。其位の事は二郎さんも大抵見てゐて解りさうなものに……」といつたりするやうな、普通の氣むづかしい所天を持つた、普通の妻君のやうな返事しかりないのである。同じやうにお直は、所天の氣むづかしさが愈昂じて、一郎の味方である筈の母親やお重までが、どうもこのごろは少し變だと言ふやうになつた時でも、二郎に向つて、「男は厭になりさへすれば二郎さん見たいに何處へでも飛んで行けるけれども、女は左右は行きませんから。妾なんか丁度親の手で植付けられた鉢植のやうなもので一遍植られたが最後、誰か來て動かして呉れない以上、とても動けやしません。凝としてゐる丈です。立枯になる迄凝としてゐるより仕方がないんですもの」といふより外、言ひやうがないのである。

勿論お直は、普通在り來りの女であるとしてしまふには、思ひ切つて飛び離れた點も持つてゐるやうである。二郎の言ふ所によれば、「彼女は男子さへ超越する事の出来ないあるものを嫁に來

た其日から既に超越してゐた。或は彼女には始めから超越すべき牆も壁もなかつた。始めから囚はれない自由な女であつた。彼女の今迄の行動は何物にも拘泥しない天真の發現に過ぎなかつた。／或時は又彼女が凡てを胸のうちに疊み込んで、容易に己を露出しない所謂しつかりもの、如く自分の眼に映じた。さうした意味から見ると、彼女は有り觸れたしつかりもの、域を遙に通り越してゐた。あの落付、あの品位、あの寡黙、誰が評しても彼女はしつかりし過ぎたものに違ひなかつた。驚くべく圖々しいものでもあつた。／或利那には彼女は忍耐の權化の如く、自分の前に立つた。さうして其忍耐には苦痛の痕迹さへ認められない氣高さが潜んでゐた。彼女は眉をひそめる代りに微笑した。泣き伏す代りに端然と坐つた。恰も其坐つてゐる席の下からわが足の腐れるのを待つかの如くに。要するに彼女の忍耐は、忍耐といふ意味を通り越して、殆んど彼女の自然に近い或物であつた。」のださうである。——二郎はどつちかと言へば、嫂の味方である。少くとも嫂の同情者である。それだけ二郎の見方は、お直をよりよく、より英雄的に見ようとする傾向もないではないが、然し恐らくお直には、さういふ所があつたのであらう。「行人」の中に描き出されたお直の言動から見ても、お直はこの二郎の想像に抵觸する何ものをも見せてゐない。然も二郎がさう思ひ、讀者がそれに別に反對しないとすれば、それはまた同時に一郎の見る所でもあつた筈だから、假令是ほどではないまでも、一郎がお直をかういふ風にも見てゐたに違ひ

ない事は、十分想像され得る所である。然もお直をかういふ風に見る見方が、一郎の頭に存在してゐるといふ事は、やがて一郎にお直を、單なる在り來りの女として見る事を妨げ、寧ろお直を普通以上に、物に動じる事のない、或意味から言へば手のつけやうのない、また或意味から言へば怖るべき存在として、何か畏怖に近い念を持つて取り扱ふ事を餘儀なくする、根本の理由となるものに外ならなかつた。Hさんと一緒に旅に出て、一郎はHさんに、自分がお直に手を當てた時の事を話し、「二度打つても落付いてゐる。二度打つても落付いてゐる。三度目には抵抗するだらうと思つたが、矢つ張り逆らはない。僕が打てば打つほど向はレデーらしくなる。そのために僕は益無頼漢扱ひにされなくては濟まなくなる。僕は自分の人格の墮落を證明するために、怒を小羊の上に洩らすと同じ事だ。夫の怒を利用して、自分の優越に誇らうとする相手は殘酷ぢやないか。君、女は腕力に訴へる男より遙に殘酷なものだよ。僕は何か女が僕に打たれた時、起つて抵抗して呉れなかつたと思ふ。抵抗しなくても好いから、何故一言でも云ひ争つて呉れなかつたかと思ふ。」と、その時自分が経験した特殊な心持を告白してゐるが、是など最もよく二郎の觀察が一郎によつても繼承されてゐる事を證明するものではないかと思ふ。一郎はこの場合、自分の力ではどうする事も出来ないもの、また自分の頭ではどう理解する事も出来ないもの、何か鐵の壁のやうなものに突き當つたやうに感じなければならなかつたのである。一郎は苦しんで苦

しんで苦しみ抜いた揚句、どうにもその苦しさの遣り場がなくなつて、お直に手を當てる。手を當てるとともに一郎は、自分で自分の人格の墮落に氣がついて、その爲め更に別の苦しい心持を経験する。然しその際お直が泰然としてゐればゐるほど、一郎は、自分をして相手に手を當てるの已むを得ざるに至らしめた者はお直その人であるにも拘はらず、即ち非はお直にあるのにも拘はらず、反つて非は自分にあると思はなければならなくなつてしまふのが、どう考へても堪らないのである。然もそれらのあらゆる苦しい経験をさせるものは、所詮はお直に外ならないのだから、一郎は自然お直を恐るべき且つ憎むべき存在と考へない譯には行かないのである。その點で『行人』の悲劇は、別世界に屬する二人の人間が、偶然夫婦になつた點にあるといふ事が出来る。普通の男が自分の妻君に手を當てる場合、男は假令手を當てる事その事が自分の人格を墮落せしめる所以であるとは感じて、それは相手が悪いのだから已むを得ないと思ひ返すだらう。然し一郎には、どうしてもさうは思ひ返せないのである。のみならず一郎は、相手が「忍耐の權化の如く」「眉をひそめる代りに微笑し」「泣き伏す代りに端然と坐つて」、自分の腕力の荒れ狂ふのを受けとる場合には、どうしても相手は「レデー」で、自分は「無頼漢」であると思へないのである。然もお直の方では、所天がどういふ氣持で自分に手を當て、手を當てた上で更にどういふ氣持になつてゐるかなどといふ事は、少しも考へる事がなく、暴君に苛ま

れる寵姫かなぞのやうに、男の狂氣に殉難する氣になつて、寧ろ端然としてその折檻を受けるのである。すると一郎はそれをお直が自分を愚弄する爲に、わざわざ自分を怒らせ、わざわざ自分に暴力を用ひさせたのだと、解釋するのである。然しもし此所で一郎を愚弄するものがあるとすれば、寧ろそれは運命であつて、決してお直ではなかつた。よしお直が愚弄したやうな形になつてゐるとしても、それは運命がお直を借りて、一郎を愚弄したのである。さうして、其所まで考へる所に一郎の鋭さがあるとともに、其所まで考へる所に一郎の運命の認識に關する——もしくは人間の認識に關する不足があつた。Hさんの言ふやうに、一郎は「自分が鋭敏な丈に、自分の斯うと思つた針金の様に際どい線の上を渡つて生活の歩を進めて行く」く「代り相手も同じ際どい針金の上を、踏み外さずに進んで来て呉れなければ我慢」が出来ない。即ち一郎は、他人も自分の通りに動かなければ氣が済まない。一郎には、かういふ場合自分ならかうするといふ、動き方に對するはつきりした意見があり、また自分なら正にその意見通り實行して見せるといふはつきりした確信があるのである。従つて一郎は、相手がその通りに動かない場合、或は自分を愚弄すると思つたり、或は自分を陥穽にかけると思つたりしなければゐられないのである。勿論それはHさんの言ふ通り、一郎の「我儘から来る」ものではなく、また世の中が一郎の豫期通りになるとすれば、その世の中は「今の世の中より遙に進んだものでなければならぬ」らないには違ひなかつ

た。然し一郎のその要求が、一人の人間に對する要求としては、あまりに過大であつた事は争はれなかつた。然も一郎は、そのあまりに過大な要求を抱いて、父に對し母に對し、弟に對し妻に對し、世の中に對した結果、「死ぬか、氣が違ふか、夫でなければ宗教に入るか。僕の前途には此三つのものしかない」といふ、ぎりぎりの所まで押し詰められて行くのである。

大正二年七月十八日漱石は中村翁へ宛てて、「拜復／＼からについての御手紙拜見致候實は先達より何人にも没交渉にてしかも小生には大いに必要な事のために頭を使ひ居り夫がため人のためには一切何事をなすの勇氣も餘裕も無之「から」の事も存じながらつい其儘に相成居候。行人の原稿などは人の事にあらず自分の義務としてもまづ第一に何とか片付べきを矢張まだ書き終らざるにてもしか御承知願上度候勿論社會とも家族とも誰とも直接には關係なき事柄故他人から見れば馬鹿もしくは氣狂に候へども小生の生活には是非共必要に候。それに何とか區切をつけぬうちには中中カラ處の騒でなく全く不人情な話ながらカラ扱はどうでもよく（小生には）相成居候。貴兄よりは怪しからぬ次第なれど小生には當然の事と覺召し被下度候」と書いてゐる。この問題がどういふ問題であるか、はつきりとは分からない。然し『行人』の『歸つてから』までに描き出されてゐる一郎の内面生活の事を考へ、且つ漱石が大正二年九月一日沼波武夫に宛てて書いた、「啓始めて確信し得た全實在は頂戴した其日に讀みました私は何より先にあなたの意氣とあなたの心持

とに感服致しました近頃は小説も評論もいくらでも出ます然しあゝいふ方面の事はだれも考へて
おません、所があゝいふ方面の事は窮所迄行くと是非共必要になつて來ます 人の事ではないみ
んな自分の頭の上の事です 私はあゝいふ意味の事で切實な必要を感じつゝ、いまだ未程の地に迷
つてゐます どうかしなくてはならないがどうもなりません 平生斯うだと思ひ詰めた事もいざ
となるとがらりと顛覆します、全く定力が足りないからだと思ひます」といふ手紙の内容に就い
て考へ、更に同じ年の十月五日漱石が和辻哲郎に與へた手紙の中の、「私は今道に入らうと心掛け
てゐます。たとひ漠然たる言葉にせよ道に入らうと心掛けるものは冷淡ではありません、冷淡で
道に入れるものではありません。」といふ言葉を考へ、最後に『塵勞』に於いて一郎が求めてゐるも
のの方向を考へて見るならば、その「何人にも没交渉にてしかも小生には大いに必要な事」もし
くは「社會とも家族とも誰とも直接には關係なき事柄故他人から見れば馬鹿もしくは氣狂に候へ
ども小生の生活には是非共必要」で「それに何とか區切をつけぬちは」何事も手につかないと
いふ事が、漱石の、心の轉向を意味するものであつたに違ひない事は、誰にでも凡そ想像のつく
事ではないかと思ふ。漱石は『彼岸過迄』で、「一つの刺戟を受けると、其刺戟が夫から夫へと廻
轉して、段々深く細かく心の奥に喰ひ込んで行く。さうして何處迄喰ひ込んで行つても際限を知
らない同じ作用が連續して、彼を苦しめる。仕舞には何うかして此内面の活動から遁れたいと祈

る位に氣を悩ますのだけれども、自分の力では如何ともすべからざる呪ひの如くに引つ張られて
行く。さうして何時か此努力の爲に斃れなければならない。たつた一人で斃れなければならない
といふ怖れを抱くやうになる。さうして氣狂の様に疲れる。」といふ須永を描いたが、『行人』に
來て漱石は、それと同じ心の傾向を、もつとぎりぎりの所まで押し詰める。然もそれをぎりぎり
の所まで押し詰めれば押し詰めるほど、漱石は自分でも足掻きがつかなくなり、どうにかするの
でなければ、それこそ『塵勞』の一郎のやうに、「死ぬか、氣が違ふか、夫でなければ宗教に入る
か。僕の前途には此三つのものしかない」といふ、「窮所」に來たのに違ひないのである。従つて
漱石は「他人から見れば馬鹿もしくは氣狂」に相違ないが、然し自分の生活にとつては「是非共
必要」な、「それに何とか區切をつけぬちは」何事も手につかない状態に置かれたのに相違ない
のである。然も「私は今道に入らうと心掛けてゐます。」といふ言葉は、漱石がその「是非共必
要」な「それに何とか區切をつけぬちは」何事も手につかない状態から脱却して、もしくはそ
の「窮所」から抜け出す事の出來る希望を、自分自身に持ち得たといふ事を證明するものと見て、
差支ないに違ひない。——さうして『塵勞』で一郎が、その境地に這入りたいと庶幾してゐる所
のものは「絶對」の境地である。

Hさんの報告する所によれば、一郎の考へてゐる絶對の境地とは「純粹に心の落ち付きを得た

人は、求めないでも自然に此境地に入れるべきだと云ひます。一度此境地に入れば天地も萬有も、凡ての對象といふものが悉くなくなつて、唯自分丈が存在するのだと云ひます。さうして其時の自分は有とも無いとも片の付かないものだと言ひます。偉大なやうな又微細なやうなものだと云ひます。何とも名の付け様の無いものだと言ひます。即ち絶対だと云ひます。さうして其絶対を経験してゐる人が、俄然として半鐘の音を聞くとすると、其半鐘の音は即ち自分だといふのです。言葉を変へて同じ意味を表はすと、絶対即相對になるのだといふのです、従つて自分以外に物を置き他ひとを作つて、苦しむ必要がなくなるし、又苦しめられる掛念も起らないのだ」さうである。さうして一郎はそれに附け加へて、「根本義は死んでも生きても同じ事にならなければ、何うしても安心は得られない。すべからく現代を超越すべしといつた才人は兎に角、僕は是非共生死を超越しなければ駄目だと思ふ」と、「殆んど齒を喰ひしる勢で」、言つたのだといふ。勿論『行人』の一郎はまだこの境地に這入れてゐない。一郎はHさんに向つて「君のやうな重厚な人間から見たら僕は如何にも輕薄な御喋口に違ない。然し僕は是でも口で云ふ事を實行したがつてゐるんだ。實行しなければならぬと朝晩考へ續けに考へてゐるんだ。實行しなければ生きてゐられないと思ひ詰めてゐるんだ」と言つてゐる。然し漱石が是だけの事を書き得る爲めには、しかも漱石が既に人に向かつて、自分は今「道に入らう」としてゐるのだと明言してゐる以上は、漱石の

「道」は、假令漱石が言葉でははつきり表現する事が出来なかつたとしても、少くとも漱石の前に、一郎の場合よりも、もつとはつきりした姿をもつて、現前してゐるものと考へなければならぬ。さうして一郎と同じやうに、自分以外に「神」といふものを立てる事を欲しなかつた漱石が、這入つて行かうとした「道」は、一口に言へば、禪の悟のやうなものらしく見えるのである。漱石が夙に禪の世界に關心を持つてゐたといふ事は、既に『門』の解説で述べた。『門』のみではない、既に漱石は『猫』の中でも、諧謔の形に包んでゐるが、その事に繰り返し觸れてもゐる。例へば漱石が『猫』第九で引用した澤菴禪師の『不動智神妙録』の一節、「心を何處に置かうぞ。敵の身の働に心を置けば、敵の身の働に心を取らるゝなり。敵の太刀に心を取れば、敵の太刀に心を取らるゝなり。敵を切らんと思ふ所に心を取らるゝなり。我太刀に心を取らるゝなり。われ切られじと思ふ所に心を取らるゝなり。我太刀に心を取れば、我太刀に心を取らるゝなり。人の構に心を取らるゝなり。切られじと思ふ所に心を取らるゝなり。人の構に心を取れば、人の構に心を取らるゝなり。兎角心の置所はない」のやうなのは、最も明白にその事を證明するものである。然も澤菴禪師は其所で「我が心を兎角餘所へやれば、心の行所に心を取止めて敵に負るほどに、我が心を臍の下に押込めて餘所にやらずして、敵の働により轉化せよ」と言つた或人の説に對して、さういふ事を言ふのは、まだ「修行稽古の時の位」に過ぎない、「臍の下に押込んで餘所へやるまじきとすれ

ば、やるまじと思ふ心に心を取られて先の用かけ、殊の外不自由になる」ものである。それよりも自分は心を何處にも置くなと言ふ。「何處にも置かねば、我身一パイに行きわたりて、全體に延びひろがりて……其の入る所々の用を叶ふるなり」、「萬一もし一所に定めて心を置くならば、一所に取られて用は缺くべきなり。思案すれば思案に取らるゝ程に、思案をも分別をも残さず、心をば總身に捨て置き、所々止めずして其所々に在て用を外さず叶ふべし」、「總身に渡つてあれば、手の入る時には手にある心を遣ふべし、足の入る時には足にある心を遣ふべし、一所に定めて置きたらば、其の置きたる所より引出し遣らんとする程に、其の處に止て用が抜け申し候。心を繋ぎ猫のやうにして餘處にやるまいとて、我が身に引止めて置けば、我が身に心を取らるゝなり。身の内に捨て置けば、餘處へは行かぬものなり。唯だ一所に止めぬ工夫是れ皆修行なり。心をばどつこにも止めぬが、眼なり肝要なり。どつこにも置かねば、どつこにもあるぞ。心を外へやりたる時も、心を一方に置けば、九方は缺くるなり。心を一方に置かざれば十方にあるぞ」と言つてゐる。是は恐らく禪でいふ、一切を放下して初めて獲得する事の出来る、悟の極致を、平易な言葉で説明し得る限り、説明しようとしたものであらう。さうして一郎は實にかういふ世界の獲得に憧がれてゐるのである。一郎が香嚴の體驗を例に引いて、「一撃にして所知を亡ふ」歡びを切に體驗したがつたのも、この邊の消息を洩して餘蘊なきもののやうに、私には思はれる。

漱石が、明治四十二二年のころ熱心に讀んでゐた『禪門法語集』の中の、鈴木正三の『麓草分』の端に、漱石は「一切ヲ放下スト、preservation of selfナル根本義ヲ滅スルノ謂ナリ。心ハselfニトラス。故ニselfハpreserveスル必要ナシト觀ズルナリ。心ハ不死不生ナリ。故ニselfハpreserveスルニ及バズト云フナリ。Selfヲpreserveスルニ及バザル故ニ凡ノ苦悶ガ消滅スルナリ。selfヲpreserveスルニ及バザル如ク之ヲdestroyスル必要モナキ故縁ニ從ツテ生存スルナリ。七情ノ去來ハ去來ニ任セテ顧ミザルナリ。心ノ本體ニ關係ナキ故ニ可モ不可モナキナリ。心ノ用ハ現象世界ニヨツテアラハル。其アラハレ方ガ電光モ石火モ及バヌ程に早キナリ。心ノ體ト用トノ移リ際ノ働ヲ機ト云フナリ。「オイ」ト呼バレテ「ハイ」ト返事ヲスル間ニ體ト用ガ現前スルナリ。ソレガ不可思議ニ早イナリ。ダカラ考ヘテ居ル様デハ分ラヌナリ。ソレガ考ヘズニ相應ズルコトガ出來レバ以心傳心ニナル譯ナリ。一タビ心ヲ知レバドウナツテモヨキナリ。此浮世デドウナツテモヨカラヌ善惡邪正數々ヲ守ル裡ニドウナツテモ構ハヌ度胸ガ出來上ルナリ。安樂ニナルナリ。カホドノ事は僧俗ニ限ラズ皆悟ルベキ筈ナリ。タゞ此境界に常住シテ活潑々地ノ活用ヲナスガ困難ナルナリ。此困難ヲ排セン爲メニ坐禪ノ修業ガ必要ナルナルベシ。シカラザレバ何ノ爲メニ打坐シ何ノ爲ニ悶々シ何ノ爲ニ苦慮スルヤヲ解スベカラズ。」と書き込んで（『別冊』参照）ゐる。また漱石は、恐らく大正四年の七月前後、即ち『道草』執筆中に書かれたらし

い『断片』の中に、「○心機一轉。外部の刺戟による。又内部の膠着力による。○一度絶對の境地に達して、又相對に首を出したものは容易に心機一轉が出来る。○屢絶對の境地に達するものは屢心機一轉する事を得。○自由に絶對の境地に入るものは自由に心機の一轉を得」と書いてゐる。かういふものから想像すると、漱石が「絶對」と稱して、その世界に這入りたいと庶幾したものの、嚴密に言へば、一郎が、其所に這入るのでなければ、竟に自分は心の落つきを得る事は出来ないと感じてゐた所のものは、自分の私に執する事から離れ、凡ての事物に拘泥する事を止めて、何物にも役せられない、自由な心を持ち得るといふ事、即ちゲーテの所謂「人間がなし遂げ得る最高の功績」を意味するものであつた事が、相當具體的に想像し得られると思ふ。然も是は、言ふまでもなく、後に漱石によつて名づけられた、「則天去私」の世界である。

勿論漱石は『行人』では、さういふ「則天去私」の世界を説いたのではなかつた。反對に『行人』では、「則天去私」の世界の朗らかさは十分想像し得ても、飽まで事物に拘泥し、飽くまで自分の私に執著しなければゐられない人間の、どうしてもその世界に這入る事の出来ない、痛ましい姿が描き出される。漱石は『禪門法語集』の扉の裏に、「禪家の要ハ大ナル疑ヲ起シテ我ハ是何物と日夕刻々討究スルニアルガ如シ。我ハ是何物ト疑ツテ寢食ヲ廢スル者ハ西洋ニモアルベキ道理ナリ。眞ニ逢着セント欲スル者ハ皆多少此疑ヲ抱クガ故ニ求真ノ念切實ナル泰西ノ學者ハ皆コ

、ニ懸命ナル精彩ヲ着スベキ筈ナリ。然ルニ希臘以來未ダ嘗テ我ハ悟ツタト吹聴シタル者ヲキカズ。怪シムベシ。ノ要スルニ非常ニ疑深キ性質ニ生レタル者ニアラネバ悟レヌ者トアキラメルヨリ致方ナシ。從ツテ雙手ノ聲、柏樹子、麻三斤 悉ク珍分漢ノ嚙語ト見ルヨリ外ニ致シ方ナシ。珍重」と書いてゐるが、漱石の「疑」は、積もり積もつて此所に来て、到頭その「窮所」に達したのである。さうしてその「窮所」を「窮所」として、それが爆發點にまで達する苦しさを、精刻に記録に止めようとしたものが、この『行人』である。

ただ『行人』の一郎は最後に、「嫁に行く前のお貞さんと、嫁に行つたあとのお貞さんとは丸で違つてゐる。今のお貞さんはもう夫の爲にスポイルされて仕舞つてゐる」と言ひ、「何んな人の所へ行かうと、嫁に行けば、女は夫のために邪よこしまになるのだ。さういふ僕が既に僕の妻を何の位悪くしたか分からない。自分が悪くした妻から、幸福を求めるのは押が強過ぎるぢやないか。幸福は嫁に行つて天真を損はれた女からは要求出来るものぢやないよ」と言つてゐる。——是は悲しい認識である。然しこの認識は、悲しいには悲しくても、それによつて一郎が初めて自分の轉向を可能にされる、認識であつたに外ならなかつた。然も自分を非とするこの認識は、必然に次の『心』を呼び出す認識でもあつたのである。

昭和十二年一月五日印刷
昭和十二年一月十日發行

漱石全集第七卷

(大森製本)

著作權者

夏目純一

編輯及發行

漱石全集刊行會

右代表者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波茂雄

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十一番地
白井赫太郎

印刷所

東京市神田區錦町三丁目十一番地
精興社







